水平線上のノア

野生のムジナは語彙力がない

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

○アイアンサーガの世界は夏真っ盛り

キラスターにせがまれ、指揮官は少数の基地スタッフを伴って海水浴へ行こうと計画する。だが、参加者が予定以上に集まってしまい指揮官は頭を抱えることになってしまう。考え抜いた末に、指揮官はみんなを『島』に招待することを決意する。

青い海、白い砂浜、鬱蒼と生い茂る森……

美しい自然に満ち溢れたプライベートな空間である『島』

「お久しぶりです。主様」

オートマタと共に『島』を管理する1人の少女

『アルトたちとビーチバレー』『ヴァルハラ勢と魔のスイカ〇割り』『本醤油＆諜報員姉妹とＢＢＱ』『エレインの乳をかけてセレニティとビーチフラッグ対決』『紺碧少女と水鉄砲特訓』など、思い思いの方法で『島』を満喫する一行。中には、ちょっとエッチな展開も……

その最中、『謎の生物』が現れて……

戦いばかりの毎日に、たまにはたっぷりめな癒しを

機動戦隊アイアンサーガ

非公式季節イベント『水平線上のノア』開幕

○注記

本作は、夏イベントを作らなかったダッチーの代わりに書かせてい

ただきました。カウボーイとのコラボシナリオは大変よかったですが、アイサガ本来の魅力（個性豊かなキャラクターたち）を表現することも忘れちゃいけないと思います。

○執筆ルール

・水着スキン所持者のみ登場（一部例外あり）

↓しかし６０名ものキャラを動かすのは無理なので……

・日ノ丸キャラ使用不可（高橋龍馬以外の）

↓前作『桜並木のアルカディア』では日ノ丸キャラ縛りをしたので

・初見の方でも読めるように工夫する

↓筆者はこの他にも『１２の月の小夜曲』『おねショタサーガ』などアイサガ２次創作を書いていますが、それらを読まなくても読めるように工夫しております。（本作を読んで面白いと思ったら是非そちらも読んでみてください）

○楽しみ方

・あなたは指揮官です。

・性別は指定していないので男女問わず楽しめます。

・指揮官のセリフは（）で示されています。必ずしも（）内のセリフを言っているのではなく、あくまでも（）内のセリフは「こういう感じのことを言った」という意味なので、あなた様の口調に合わせてセリフを脳内で変換して下さい。

目次

プロローグ1 ―― 1
プロローグ2 ―― 11
第1話：ビーチバレーと謎の生物 ―― 25
第2話：ヴァルハラ勢と魔のスイカ割り ―― 42
第3話：真夏の幼女たち ―― 58
第4話：ＢＢＱと誘惑の日焼け止め ―― 67
第5話：続・真夏の幼女たち ―― 83
第6話：岩場でスロぴょい ―― 100
第7話：水底の亡霊 ―― 120

プロローグ1

昔々、あるところにひとりの少女がいました。

少女は特別な力を持ってました。

それは一度使えば、人を幸せにも不幸せにも出来る強力な力でした。

その頃、世界は戦争ばかりが起きていました。

そんな中で、少女という存在は村人たちの希望でもありました。村人たちは力を持つ少女のことをもてはやし、少女は村人たちからの期待を一身に受けて成長していきました。

長い長い戦いの末に、

やがて戦争は終わりを迎えました。

村人たちは、昔に戦争があったことも忘れて平和な日々を楽しみ始めました。その一方で、存在意義がなくなり無用の長物になった少女のことを、村人たちは邪魔者扱いし始めました。

いつの時代もそうです。

人間とは、かつて世界に平和をもたらしたはずの存在であっても、ただ強大な力を持っているというだけで危険なものと見なし、遠くに追いやりたくなってしまう生き物なのです。

争いのなくなった世界に、

少女はいらなかったのです。

少女は旅立つことを決めました。

誰にも見送られることなく、生まれ故郷に永遠の別れを告げ、それから少女の長い長い旅が始まりました。

しかし、少女は寂しくはありませんでした。

その道中、少女は『傷だらけの大きな魚』と出会いました。少女は魚の力を借りて、村人たちの目の届かない暗闇に向かうことにしまし

た。
やがて暗闇の底に辿り着くと、魚は力尽きて死んだように眠ってしまいました。
それからというもの、
魚の上で、少女はずっと待ち続けました。
この広い暗闇の中から
誰かが、いつか自分のことを見つけ出してくれることを信じて……
少女はたった1人で、来る日も来る日も待ち続けました。
自分が必要とされる、その日が来るまで
自分を必要としてくれる人が現れるまで……
それから数百年の月日が流れました。

機動戦隊アイアンサーガ
非公式夏イベント『水平線上のノア』
プロローグ

新暦??（ＡＤ２５??）年８月３日
エリア????
????ベース
「ねー！ねー！　指揮官！　海行こう海!!」
夏真っ盛りなその日……

程よく冷房の効いた執務室で、シェロンと共に書類作業を行っていた指揮官の元に、1人の来客があった。
（キラスター……急にどうしたの？）
指揮官はペンを握る手を止め、デスクの正面に身を乗り出すようにしている小柄な少女のことを見やった。
赤毛の短いツインテール、大きな瞳の奥には彼女のチャームポイントである星のマークが浮かび、元気いっぱいといったような表情で指揮官のことを見つめていた。
その少女……キラスター
かなり幼く見えるが、その中身は世界中を旅する凄腕賞金ハンターで、手にしたパンダちゃんハンマーでこれまで多くの賞金首を『ぶっ飛ばしてきた☆』のだと言う。
どういうわけかキラスターは水着姿だった。
基地内であるにも関わらず、大きく着崩した薄手のパーカー（ピンク色）の下にはビキニを着用しており、上下ともにセクシーな黒色ではあったものの、貧相な体つきの為それほど色っぽくはなかった。
「おい……今なんか、失礼なこと考えたでしょ」
（いや、そんなことないよ）
「本当に～？　胸が小さいからって……」
（本当本当。それで、なんで水着姿なの？）
「それは勿論、海に行く為に決まってるでしょ☆」
そう言ってキラスターは『ばちこーん☆』という擬音が聞こえてきそうなウィンクをして見せた。
（もしかして、今から？）
「そう！　今から☆」
（あー……それなら1人で行ってきたら……）
「むー、1人じゃつまんないの！」
（じゃあ他の誰かを誘って……）
「誘ったよ！　でも、姫様やヴァルハラのみんなどころか、基地のスタッフたちもみんな忙しいって言って、誰も話に乗らなかったんだ……もう、つまんないの！」

基地のスタッフはともかく、ヴァルハラの面々は流石に無理があるだろう……指揮官がそう思っていると、キラスターは可愛らしい上目遣いで指揮官のことを見つめてきた。
「指揮官は一緒に行ってくれるよね？」
（……それは）
指揮官はデスクの上に積み上がった大量の書類を見て、みんなと同じく自分も忙しい身であると、首を横に振った。
「ええー、そんなぁ……」
途端に、キラスターは悲しそうな表情になった。
「どうしても？」
（ごめんね）
「そんなぁ……しょんぼり」
（というか、何でそんなに海に行きたいの？　ヴァルハラには海水浴の文化はそれほど浸透してはいなかったよね？）
「だって去年、みんなで海に行った時はすっごい楽しかったんだもん！　だから今年もみんなで楽しくやりたいなって……」
（ああ、そっか……）
キラスターの言葉に、指揮官は去年のことを思い出した。
去年はそれほど忙しくなかったことに加えて、時間的にも余裕があったこともあり、普段お世話になっている基地スタッフたちを連れて、指揮官は海に行っていた。
事前にビーチを貸し切っていた甲斐もあってか、他の誰にも邪魔されず、ゆったりと楽しい時間を過ごす事ができたと、参加したスタッフたちの間では好評となっていた。
それは海水浴の文化がないヴァルハラ同盟出身のキラスターも同様だったようで、最初は水着を着ることにすら抵抗があったものの、終わってみると大変満足げな表情を浮かべているという有様だった。
「だから今年も楽しみにしてたんだー」
頑張って準備した甲斐あって出来た海水浴。
キラスターがこうして水着姿で基地内を歩き回るほど心待ちにしてくれていると思うと、指揮官はやってよかったと心の底から思え

た。
（そういえば、もう夏なんだね……）
　去年の夏がつい最近のことのように思える……季節が巡る早さに、指揮官は感慨深いものを感じるのだった。
（ん……分かった）
　そこで指揮官は、自分でよければ付き合うという旨のことをキラスターに伝えた。すると、キラスターは顔を上げて瞳を輝かせた。
「え!?　いいの！　本当に!?」
（うん……と言っても、準備とかしないといけないから今からってのは流石無理だけど、そのかわり明日だったらいいよ。それまでにここにある仕事を全部終わらせるから……それでどう？）
「明日ね！　やったー☆」
（≧▽≦）
　こんな感じで、キラスターはとびっきりの笑顔を浮かべ、喜びを露わにした。
（あ、それとさ……）
「んー？　何ー？」
（水着、相変わらずよく似合ってる）
「むー……それってつまり……あたしの体が去年と比べると全然成長してないって言いたいわけ？」
（いや、そんなつもりは……）
「なーんてね。えへへ……指揮官にそう言ってもらえると、なんか嬉しいなって。それじゃあまた後でね！」
　元気よく走り去っていくキラスターを見送った後、指揮官は書類作業を再開した。
（シェロン、どう思う？）
　指揮官はペンを握る手を動かしつつ、隣のデスクで黙々と書類整理をしているシェロンへと尋ねた。
「んー……シーズンだし、今から海行くってなると、どこも混んでるでしょ」
（そうだよね。予約するにしても今からじゃ無理だろうし……まあ、

比較的人の少ない小さなビーチくらいだったらなんとか大丈夫そうかな）
「というか、明日の分の仕事はどうするわけ？」
（今日の内にやれるところはやっておくよ。それに海に行くって言っても、去年と比べると今年は規模もそんなに大きくないから……ん、少し遊んで帰った後にちゃんとやるよ）
「それはそれで大変じゃない？」
（それはそうだけど……やっぱりスタッフ達にも息抜きは必要だし、それに自分が必要だって言うんだったら、それくらい付き合うさ。というわけで、ついでに何人か誘ってみようかな。シェロンも行く？）
「やだ。外は暑いから」
（だよねー）
　いつもと変わらないシェロンに小さく苦笑しつつ、指揮官はペンを机の上に置き、考える素振りを見せた。
（インターンシップで来てるＡ．Ｃ．Ｅ．学園の生徒たちは林間学校があるそうだから除外して、それ以外で連れて行けそうな人は……）
　指揮官が誰を誘おうかと考え始めた時だった。

『あー、あー、マイクのテスト中～』

　ん……？
　突然、天井の隅に設置されたスピーカーからそんな声が響き渡った。声の反響具合から、それが基地内全域を対象にした全館放送であることが分かる。
「指揮官、この声……キラスター？」
（そうだね。でも、なんか凄く嫌な予感が……）

『みんな～！　指揮官が海に連れて行ってくれるんだってさ！　というわけで、指揮官と一緒に海に行きたい人は明日の朝、司令部の前に集合ね～☆』

ガタッ
放送を聞くなり、指揮官は勢いよく立ち上がった。
「んー……アニキ、どうしたん？」
（ちょっと……行ってくる）
「そう、行ってら～」
執務室を飛び出した指揮官は、そのまま何処かへと走り去ってしまった。その間も、キラスターによる全館放送は続く……

『繰り返すよっ☆　指揮官が海に連れて行ってくれるんだって……』
『（キラスター!!）』
『ん？　ああ、指揮官どうしたの？』
『（なにしてんの……）』
『あー、これ？　どうせ行くんだったら、みんなで行った方が楽しいでしょって思って、いやいや、絶対そっちの方がいいでしょ！　というわけで、こうして全館放送で基地のみんなに海行こうって呼びかけているの☆』
『（それはそうかもしれないけど……でも、大人数を連れて行くのはちょっと無理だから！　ビーチだって予約してないからね？）』
『えー、指揮官だから何とか出来るでしょ』
『（指揮官だって出来ることと出来ないことが……とにかく一旦落ち着いて、今すぐ放送をやめようか！）』
『ちょっ……ひゃん！　ど、どこ触ってんのよ！　この変態！』
『（人聞きの悪いことを……そもそも基地内を水着姿で歩き回る人に言われたくない！）』
『離せー、おっぱい触んな！』
『（触ってない！）』
『今すぐ離さないと???燃やすぞ☆』
『（女の子がそんな言葉遣い……いけません！）』

「なにこれ……」
執務室に1人残されたシェロンは、スピーカーから聞こえてくる2人の喚き声を聞き、ため息と共に肩をすくめて見せた。

こうして、一時的にとはいえキラスターによって発信されてしまった『指揮官主催の海水浴』の情報は、基地のネットワークを通じて瞬く間に世界へと拡散されてしまい……

翌日の朝……
司令部前

（嘘ぉ……）
『指揮官の主催する海水浴』を目当てに、司令部の前に集まった基地スタッフ、パイロット、そして各国要人達……その数およそ６０名の姿を見て、指揮官は途方に暮れることとなった。
その中には、どこでこの話を知ったのか……ヴァルハラの女大公であるトリスタとレイア、そしてアルセールの姿があった。極め付けは、機械教廷の教皇・スロカイと、彼女に仕える騎士達である。
最早、団体旅行である。
せいぜい５～６人くらいで行く息抜きを想定していた指揮官にとって、この人数はあまりにも多すぎた。
「あちゃ～、たくさん集まっちゃったねぇ」
司令室の中で指揮官が頭を抱えていると、窓から下の様子を覗き込んでいたシェロンがのんびりとした様子でそう言った。
「どうすんの？　指揮官」
（今考えてるところ……）
指揮官が行こうと考えていた穴場スポットのビーチは小さく、６０名も押しかければパンクしてしまうのは明らかだった。
ならば大きなところに行けば良いと考えるかもしれないが、夏真っ盛りの今、海水浴シーズンであるためどこの海も混雑している。そんな中へ身分も国籍もバラバラなメンバーが６０名も押しかけるのだ、

他の海水浴客との間で何かしらのトラブルが起こらないとは言い切れなかった。
　さらに言えば、トリスタやスロカイなど一国の主人も参加しようとしていることから、それはＶＩＰである彼女達の身を指揮官が預かると言うことを意味しており、十分に安全が確保出来なければとても実行に移すことができなかった。
　本来であれば、その場所が安全かどうか十分な下調べを行なった上で貸切状態にし、最悪の事態を想定して海上封鎖や航空管制を行うことでようやく実現可能な話だった。
　去年は実に２ヶ月もの期間を費やし、そうすることで何とか各国の要人達を誘うことが出来た。しかし、今からそれをやるとなると時間が圧倒的に足りず、どうやっても不可能なように思われた。
（複数の場所に参加者を分散させるか……いや、それだと何かあった時に対処できないし）
「どうするアニキ？　事情を話して帰らす？」
（いや、参加者達の中には機械教廷やヴァルハラから遠路はるばるお越し頂いた方もいる……身分が身分だけに、手ぶらで帰すわけにはいかない）
「じゃあどうすんのさ」
（……今考えてるとこ）
「早くした方がいいよ？　みんな待ってるっぽいし」
　考える指揮官を見て、シェロンはため息を吐いた。
（ちょっと待って……後もう少し）
「んじゃあ、無人島にでも行ったら？」
（ん……それはちょっと、安全面で怖いかな）
　無人島だと、他の海水浴客とのトラブルはなくなるが、その代わりに毒を持つ生物やサメとの遭遇など、別の問題が生じる恐れがあった。
（あ……！）
　１つだけあった。
　ビーチを貸切状態にできて、６０名もの参加者を収容できる広さが

あり、さらに安全性も十分に確保された場所……いや『島』が
「どったの？」
（シェロン……ナイス！）
　指揮官はシェロンへそう告げると、服のポケットから個人用端末を取り出し、そして世界各地に派遣した機動部隊の状況を確認し始めた。
（この近くにいて今すぐ動ける機動部隊は……これだ！　シェロン、悪いけど『ビッグ・キャリアー』に召集をかけて！　それと多分、泊りがけになると思うから後お願い）
「ちょっ……!?　それじゃあ仕事はどうすんのさ、言っとくけどあたしは代わりにやんないからね！」
（大丈夫、あっちでやってくるから）
「あっち……？」
　指揮官は司令室にある自分専用の椅子へ向かい、椅子の側面にあった隠し扉からホットライン用の特別な受話器を取り出し、その番号へダイヤルを回した。
（……久しぶり、ちょっといいかな？）

プロローグ２へ続く……

プロローグ２

非公式夏イベント『水平線上のノア』
プロローグ２

指揮官との海水浴を心待ちにして集まった、およそ６０名の参加者を連れて指揮官が向かったのは、??洋上に浮かぶ小さな島だった。

鬱蒼と生い茂った森、その周囲に点在する自然の作り出したビーチ、澄み切った青空の下、島の周囲に他の島や陸地は見えず、一面に海が広がっているという……まさに絶海の孤島である。

船を接岸させる波止場を超えると道が二手に分かれており、その内の１つは小高い丘のある島の中央へと続き、木々に囲まれた小道を少し進むと、丘の麓に建てられたレトロな雰囲気の白い洋館に辿り着く。

もう一方の道は島の外周にあるビーチへと続いており、白い砂浜、波打ち際に押し寄せる穏やかな波、海の深い青色、そしてどこまでも広がる水平線を望むことができた。

指揮官達の乗る船が島の手前に着水し、ゆっくりと接岸すると、波止場の入り口にある灯台から２つの人影が姿を現し、桟橋を渡って船に近寄ってきた。

人の形をしたそれは、特にこれといって特徴のない顔立ちをした男女だった。無表情で、両名供に白い軍服の上にマントを羽織った服装をしており、息の合った動きで船の前まで移動した。

一見すると双子かと見間違うほど似通った両名ではあったが、しかし、下半身が車輪のついた移動ユニットになっていることから、彼らがオートマタであることが分かる。

船から降りた一行は、２体のオートマタに連れられるようにして島の中央部にある洋館へと移動した。

洋館に辿り着くと、そこから男女に分かれ、それぞれ別々の部屋へ

案内される運びとなった。
　その後、夜になるまで各自で自由時間ということになり、参加者達は思い思いの方法で『島』を満喫しようと動き始めた。
「すげぇな……」
　部屋に通されたベカスは、落ち着いた内装と至れり尽くせりな設備に感嘆の声を上げつつ、ベランダの扉を開けた。眼下に太陽の光を受けてキラキラと輝く美しい海が広がっており、さらに心地よい潮風が部屋の中へと吹き込み、開けっ放しのドアから通路へと流れていった。
（どう？　気に入った？）
「お、指揮官。いや……気に入ったも何も……オレ今まで、はこんなに居心地のいいホテルに泊まったことなんてねーぜ！　ひゃっほう！」
　部屋の入口にいた指揮官へと振り返ったベカスは、そう言って勢いよく背後のベッドに寝転がった。
（そう？　確かアフリカで高級ホテルに泊まったことがあったような……）
「いやな……いくら高級だからと言って、それが居心地の良さに直接繋がる訳じゃねぇんだこれが。カルシェンには悪いがオレにはこっちの方が合ってる」
（あー……確かに、周りに高そうな調度品ばかりがあると落ち着かないよね）
「まー、それは人によりけりだとは思うけどな。だが、ホテル側は客のニーズに合わせて変更点を加えるとかしてだな……とにかく、そこんところをしっかりして貰って……」
（あはは……まあここはホテルじゃなくて、どちらかというと別荘みたいなものだけど）
　そう言って指揮官は、部屋の中にいたもう1人へと視線を向けた。
「先生見て見て！　すっごく綺麗だよ！」
　その少年……高橋龍馬はベランダに駆け寄り、軽く手すりに身を乗り出した。そして、海の方を眺めて満面の笑みを浮かべ、指揮官へと振り返った。

（そうだね）
「うん！　こんな綺麗な景色……僕、もしかしたら生まれて初めてかも」
（ん……それは褒めすぎじゃない？）
「龍馬、ひとつ聞いてもいいか？」
　はしゃぐ龍馬を見て、微笑ましいものを感じた指揮官は小さく笑った。その一方で、ベッドの上で足を組み、両腕を枕にしてリラックスしていたベカスがふと、龍馬へと声をかけた。
「うん、何かな」
「なんでいるんだ？」
「えっ？」
「いやだってお前……今日、Ａ．Ｃ．Ｅ．学園の生徒は林間学校があるって聞いていたんだが」
「あー……それなんだけど……実は」
　ベカスの問いかけに、龍馬は気まずそうな表情を浮かべつつも、自分がここにいる理由を説明し始めた。
　Ａ．Ｃ．Ｅ．学園に所属する龍馬は、本来であれば姉の高橋夏美や佐伯楓たちと共に林間学校に行かなければならない身ではあった。
　しかし、本人が林間学校の日程を勘違いしていたことで、インターンシップで基地に来ていたＡ．Ｃ．Ｅ．学園組の中で、１人だけ取り残される形となってしまっていた。
　その為、それを不憫に思った指揮官は、急いで姉の夏美やＡ．Ｃ．Ｅ．学園の教員（エリカ）に『龍馬のことは、こちらの方で面倒を見る』という旨の連絡を入れ、もののついでという事で急遽『指揮官主催の海水浴』への参加が決まった。
「なんか……ズル休みしているみたいで罪悪感が」
（まあ、これに関してはこちらの連絡ミスという見方も出来なくはないから……龍馬くんはあんまり気にしなくてもいいよ）
「そんな！　先生たちは悪くないんです！　僕がついうっかりしていたからで……」
（まあ、そういう訳だからさ……林間学校に参加できなかった分、こっ

ちの方で楽しんでね）
「はい！　そうします！」
　いつも通りの調子を取り戻した龍馬は、元気いっぱいそう答えた。
しかし、それを見ていたベカスは……
「知ってるか龍馬！　男らしい人ってのは、よく学校をサボるものなんだぜ」
「えっ……そうなの!?」
「そうなんだよな～。ほら、よくドラマやアニメなんかの男らしくてカッコいい主人公も、何かにつけて学校から抜け出してるしよ。だからこの調子で龍馬もどんどん学校をサボって……」
（はいそこ、息を吐くように嘘つかない）
　龍馬がベカスの言葉に真剣に耳を傾けようとしていたので、指揮官はベカスの言葉を止めることにした。
（仮にも教員だったこともある人が何を……）
「残念、オレにはその記憶がねーんだわ」
（まったく……）
　そう言ってニヤリと笑ってみせるベカスに、ため息を吐きながら、指揮官は2人に背を向けた。
「あれ、先生どこ行くの？」
（ちょっと『島』の管理人と会ってくる。長くなると思うから、ベカス達は先にビーチで遊んでてね）
「うん、分かったー！」
「……」
　龍馬は指揮官を手を振って見送った。
　しかし、その一方でベッドの上に寝転がっていたベカスの目に、何やら怪しげな色が浮かび上がっていたことに気づく者はいなかった……
「よし、龍馬……そろそろ水着に着替えようぜ！」
「そうだね！　えっと……水着は確か鞄の中に……」
　何気ない会話から、水着が鞄の中にある事を確認したベカスは……
そして、ついにそれを実行に移すことにした！

「龍馬！　見ろ！」
「えっ!?」
「外に恵方巻きが浮いているぞ！」
「恵方巻き大好き！　どこどこ!?」
　そう言って龍馬の視線をベランダの外へと誘導したベカスは、素早くベッドから起き上がって龍馬の鞄へと駆け寄り……そこから音もなく水着（男子用）を抜き取って、自身の懐に忍ばせた。
「あれ～、恵方巻きなんていないけど？」
　ひとしきりベランダの外を見て、恵方巻きの存在を確認出来なかった龍馬が振り返ると、そこには何食わぬ顔をしてベッドの上に寝転がっているベカスの姿があった。
「いや、スマン。どうやら見間違いだったみたいだ」
「もー、ベカスったらおっちょこちょいなんだからー」
「わりぃ、それよりも早く水着に着替えようぜ」
「そうだね。えっと水着は確かここに……あれ？」
　自分の水着を探して鞄を探っていた龍馬だったが、いくら探しても入れておいたはずの水着が忽然と消えてしまっていることに気づき、徐々に慌て始めた。
「どうした？」
「その……どうやら水着を忘れてしまったみたいなんだ。うぅ……林間学校の時といい、僕って何ておっちょこちょいなんだ……」
「気にするなよ。水着がないって言うんだったら他の誰かから借りればいいじゃねーか！　そうだ、こんな事もあろうかとオレはもう1つ水着を持ってきてるんだった！」
「本当に!?　じゃあ、貸してくれるの？」
「ああ、困った時はお互い様って言うしな……ほら」
「わぁ、ありがとう!!」
　そう言ってベカスは懐から水着を取り出した。
　何故、そんな所に水着を忍ばせていたのだろうか……そんな事も気にせずに、龍馬はベカスから2つの布を受け取った。
「え？　水着が2つ……って、ベカス！」

「なんだ、どうしたんだ?」
「これって、女の子用じゃないか!」
それは上下に分かれた女子用の水着だった。
しかも、龍馬にぴったりのサイズだったりする。
「あー……わりぃ、うっかりしてたわ。まあしょうがないから今回ばかりはそれ付けてくれよな!」
「着ないよ! 僕は男の子なんだから!」
「オイオイ、そんなこと言っていいのか? 普段は忙しくしている指揮官がせっかく海に誘ってくれたんだぜ? それなのにお前さんは海に入らねぇって言うんだったら……指揮官に悪いと思わないかぁ?」
「そ……そんな……」
女子用の水着を持ったままどうしていいか分からずオロオロとしている龍馬に、ベカスは真剣な眼差しを浮かべて続けた。
「龍馬、ほかに選択肢はねぇんだ」
「うぅ…………うん、分かった」
龍馬は静かに頷くと、顔を真っ赤にしながらも水着に着替えるべく、バスルームの中へと入った。

「計画通り!!!」
ベカスは悪い笑みを浮かべた。

「へっへっへっ……最近は指揮官やグルミとかいうガキどもに規制されて中々拝むことが出来なかったが、久しぶりの龍馬ちゃんだぜグへへへへへへへwwwww」
気持ちの悪い笑みを浮かべ、ベカスは龍馬のいるバスルームへ忍び寄ると、その扉へと張り付いた。そして中から聞こえてくる衣擦れ音に耳を澄まし、その興奮度合いはさらに高まっていくのだった。
「龍馬たん龍馬たん……はぁはぁ……」
息を荒くして扉を舌舐めずりしていたベカスは、そこでふと、龍馬がバスルームの扉に鍵かけていない事に気付いた。

「……そうか、フッ……なるほどな」
それはただ単に、恥ずかしさのあまり龍馬が鍵をかけ忘れていただけなのだが、そんな事を知らないベカスはそれを自分にとって都合が良いように解釈し始める。
「つまり誘ってるんだろう？　龍馬ちゃーん！」
両手をワキワキとさせ、ベカスはバスルームのドアノブに手をかけた。「今イクよ！　龍馬ちゃん！」心の中でそう叫びながら、ドアノブを回し……そして、ドアが勢いよく開かれた。
「……なっ!?」
いや、違う。
開かれたのはバスルームの扉ではなかった。
「……お前は!?」
素早くバスルーム前から飛び退き、ベカスは部屋の玄関へと視線を向けた。大きく開かれた扉、その先に立っていたのは1人の男だった。
「なんだ……お前かよ、ウッド」
「……」
扉の向こうにいた男の姿を見て、ベカスは安堵のため息を吐いた。
それはＵＳＦ所属の軍人・ウッドだった。
黒のラッシュガードにスパッツ姿の彼は、何も言葉を発する事なく、代わりに意味ありげな視線をベカスに向けている。
「全く……指揮官じゃねーかってヒヤヒヤしたぜ」
「……」
「ウッド？」
「……」
ベカスの声に応えることなく、ウッドは無言で部屋の中へと足を踏み入れた。その只ならぬ雰囲気に、ベカスは思わず一歩退いた。
ウッドは両手に何かを持っていた。
しかし、ウッドの手元がちょうど暗がりになっていた為、ベカスの位置からではそれが何なのかを視認することが出来ない。
「オイ、何か言えよ……というか何持って……」

ウッドがゆっくりと近づいてきた事で、ベカスはウッドが持つそれが何なのかを、ようやく理解することが出来た。
「お、女物の水着……？」
「……」
ウッドが左手に持っていたのは、女性用の白い水着だった。トップは眼帯と呼ばれるもので、胸の中心が開いたセクシーな作りのもの。アンダーは三角ビキニに純白のパレオが組み合わさったものとなっている。（諸説あり）
「な、なんだよその瓶は……」
「……」
続いて、ベカスはウッドの右手にある瓶を注視した。
「ま、まさかそれ……ＴＧＭか!?」
「……」
ウッドが右手に持っていたのは、ＴＧＭと呼ばれる薬品の入った瓶だった。ＴＧＭはオスカー製薬（仮）の開発したトランスジェンダーメディスンで……

つまり服用者の体に『性転換』を促すのである。

「オ、オイ……ウッド！　そんなもんどこで……」
その薬の効果を知るベカスはひどく狼狽した。
その間も、ウッドは徐々にベカスへ距離を詰める。
「まさか、お前……」
ベカスの脳裏にバレンタインデーの記憶が蘇る。以前、ベカスはＴＧＭを服用して女体化した際に、こうしてウッドに迫られた事があったのだ。
［詳しくは『焦燥バレンタイン』を参照下さい］
そして、ウッドはこう一言……

「ヤ・ラ・ナ・イ・カ・!?」

「やらねーーーーよおおおおおおお!!!!!」

「着替えたよー、って……あれ？　ベカス？」
　水着に着替えた龍馬がバスルームから出ると、つい先ほどまで部屋の中にいたはずのベカスが忽然と消えてしまっていた。
「えぇっ……!?　なんでこんな、酷い有様……」
　代わりに、部屋の中はまるでここだけ台風が駆け抜けていったかのように酷く荒れていた。物は倒れ、ベッドは大きく乱れ、窓ガラスは全損、照明の灯りはスパークを引き起こし、何もかもがぐっちゃぐちゃになっている。
「もー……ベカスったら、遊んだ後はちゃんとお片付けしなさいって子どもの時に教わらなかったのかな……」
「おーい、龍馬くんいる？」
「入ってもいいか？」
　龍馬が部屋の惨状に小さく腹を立てていると、玄関の扉がノックされると共に、扉の向こう側から2人組の声が聞こえてきた。
「あ、入ってもいいよー」
「失礼するよ……って、り……龍馬くん!?」
「お、お前……ッ、なんて格好してるんだ!?」
　部屋に入ってきたのはアルトとグルミだった。
　両名とも水着姿で、上にパーカーを羽織っている。
　2人は女物の水着を着た龍馬の姿を目にするなり、酷く驚いた表情を浮かべた。
「あ、これ……その、似合ってるかな？」
　龍馬は恥ずかしそうにしながらも、自分の着ている水着を示した。

ヒラヒラと揺れるフリルが特徴的な、子供用の黄色いビキニである。
（諸説あり）
「いやいやいや!!!　似合ってるかどうかそういう問題じゃなくて……いや、似合ってると言えば確かに似合ってるけど……た、多分！」
「あ、ああ……それよりも何で男のお前が女物の水着なんか着てるんだ？　というか、なんだこの部屋の荒れ具合は……まさか、あの男になにかされたのか……!?」
　最悪の事態を想定し、アルトとグルミは青ざめた。
「ち、違うよ！　ベカスは何もしてないよ！　むしろその逆で……水着を忘れてしまった僕の為に、水着を貸してくれたんだ。女の子用だったんだけど……」
「そ、そっか……」
「ならよかった……」
「う、うん……？」
　龍馬の言葉から大体の事情を察したアルトとグルミは、そこでほっと胸を撫で下ろした。純粋な龍馬は彼らの抱いた懸念の事を知らないこともあって、疑問符を浮かべるばかりだった。
「でも……部屋が酷いことになってるけど？」
　入口から部屋の中をチラリと見て、アルトが告げる。
「うん。着替え終わってから見るとこうなってたんだ」
「何があったにせよ、お前は部屋を変えるべきだろう。そもそも最初から、あんなオッサンとお前を2人きりにさせる訳にはいかなかったんだ……」
　グルミはため息と共にそう呟いた。
「まあいい、それよりも早く下に行こう。確かシャロと曦夜が待っているんだろう？」
「そうだった！　でも、龍馬くんが……」
「僕は大丈夫だよ！」
「そう？　ならいいんだけど……じゃあ行こうか」
　龍馬の言葉に頷きを返したアルトは、そう言ってグルミと共に下のロビーに向かって移動を始めた。龍馬は水着の上に薄手のカーディ

ガンを羽織ると、２人の後に続いた。
荒れた部屋の中、その片隅に落ちていた龍馬の水着（男の子用）が発見されるのは、それからしばらく後のことだった……

ーーーーー

「あれ？　指揮官……なにしてんの？」
（ん……ああ、シェロン）
『島』の管理人と会う為に部屋を出た指揮官は、偶然にも通路でシェロンと遭遇した。
（シェロンこそ、ここで何を？）
「あたし？　あたしは……暇だからちょっとウロついてただけ。まあ適当に見て回ったら部屋の中でのんびりゲームでもするつもりー。あ、指揮官も部屋に来る？　一緒にダラけようよ」
（残念だけど、基地から持ってきた仕事をやらなくちゃだから……）
「えぇ、こんな時にまでお仕事？　せっかくのバカンスなんだから仕事のことは忘れて沢山遊びなよ」
シェロンは呆れたような表情を浮かべた。
本来であれば指揮官不在の基地を運営する為に、留守番をしていた筈のシェロンだったが、泊りがけになる事を知るや否や、基地の運営を待機していた機動部隊の隊長に任せ、こうして指揮官と共に『島』にやって来ていた。
（勿論、仕事が終わってからそうさせて貰うよ。というかシェロンだって、せっかく海に来たんだから泳ぎにでも行ったらいいのに……）
「泳ぐと疲れるからヤダ。っていうか、そんなにあたしの水着姿が見たいわけ？」
（まあ、それもあるかな）
「え？　それマジで言ってる？」

（そりゃあね。だってシェロン、基地の中でデスクワークばかりで全然運動してないでしょ？　だから水着を着けてくれてるってことは、少しでも運動しようとする気になってくれたって事で……）
「ああ、そういう事ね」
　指揮官の言葉に、シェロンはつまらなさそうに肩をすくめてみせた。
（どうしたの？）
「はぁ……何でもない。っていうか運動しろって言われてもさぁ、あたし別に太ってないけど？」
（太ってるとかそういう問題じゃなくて……シェロンはまだ若いからいいけど、でも今の生活習慣が年を取ってから影響してくることもあるって聞くし……今の内に改善していった方が）
「うっさい！　オカンか！」
（そこはお父さんじゃないんだ……）
　アニキの次はお母さんか……
　自分に対するシェロンの呼び方に、指揮官は苦笑した。
「まあでも……前の時みたく、ここにはウザ絡みしてくるような連中もいなさそうだから、気が変わったら行ってみるよ」
（本当に？）
「気が向いたらねー」
（それ、絶対やらないパターンだよね……）
　シェロンの言葉にため息を吐いた指揮官だったが、まあ『島』でどう過ごすかは彼女の自由だ……と、それ以上は何も言わないことにした。
「で、指揮官はどこに？」
（いや、ちょっと管理人に会いに行こうかと）
「管理人って、あれのこと？」
　そう言ってシェロンは通路の先を指差した。
　指揮官が振り返ると、ちょうど男性型のオートマタがエレベーターに乗り込もうとしているところが見えた。
（いや、管理人と言っても、あのオートマタたちはこの洋館を管理して

いるだけで……『島』の管理人は別にいるんだ）
　そう言いながらシェロンへと振り返った指揮官は、次の瞬間『それ』の存在に気づいた。いつからそこにいたのだろうか、シェロンの背後に小柄な少女が佇んでいる。
「……」
　ショートにまとめられた青い髪、深い海のような色をした瞳、幼さを感じさせる顔立ちと、起伏の少ない体つき、その表情に一切の感情はない。
　オートマタたちがつけているものと同じマントを羽織り、その隙間からチラチラと見える服装は黒のスポーツブラにショートパンツのみと、肩とヘソが丸出しの状態で、肌色面積が多かった。

（ああ、噂をすれば……）
「え？」
　指揮官の視線に気づいたシェロンがキョロキョロと後ろを振り返るも、少女はシェロンの動きに合わせて音もなく移動し、常にシェロンの死角に位置取った。
（ノア、久しぶり）
「はい、主様。お久しぶりです」
　ちょうど隣に来たところを見計らって指揮官が少女に声をかけると、その少女……『ノア』は無表情のまま碧色の瞳で指揮官のことを見つめ、そう言って小さく頭を下げた。
「え……うわっ!?　びっくりした！」
　背後から聞こえてきた声に、シェロンはびくりと震えた。飛び退くようにして振り返り、そして指揮官の隣に佇む少女を不思議そうに見つめた。
「1年と2日、8時間31分5秒ぶりですね」
（こうして面と向かって話すのはね。元気してた？）
「はい。主様もお変わりなく……」
（それは良かった）
　そう言って指揮官は微笑みを浮かべるも、しかし『ノア』と呼ばれ

た少女は氷のような無表情を崩すことなく頷くのみだった。
「えっと、だ……誰……？」
まるで幽霊のようにいつのまにか姿を現した『ノア』を見て、シェロンは戸惑いを抱きつつもそう聞いてみた。
「……お初にお目にかかります。私は『ノア』と申します。僭越ながら、この『島』の管理をさせてもらっている者です」
『ノア』はそう言って、無表情のまま小さく頭を下げた。
第1話へ続く……

第1話：ビーチバレーと謎の生物

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第1話：ビーチバレーと謎の生物

島に到着してから約1時間後……

（ふぅ……これくらいでいいかな）
「指揮官、こっちはこれでいい？」
（見せて……ん、よく書けてると思う）
「オッケー？　ならこれで終わりねー」
指揮官とシェロンは『島』の奥底にあるコントロールルームの設備を借りて、基地から持ってきた仕事を一通り終わらせることができた。
「あ～、疲れたぁ……」
（シェロン、お疲れさま）
「そっちもね～、ふわぁ……」
小さく息を吐いて背伸びをするシェロンに指揮官が労いの言葉を送ると、シェロンは欠伸交じりにそんな返事をした。
「お疲れ様です。主様」
指揮官が周囲に広がる電子スクリーンを解除すると、ちょうど目の前に『ノア』の姿が現れた。その手には、冷たいドリンクの入ったボトルが握られている。
（ノアも、手伝ってくれてありがとう）
「いえ、お安い御用です」
指揮官がボトルを受け取ってお礼を述べると、『ノア』そう言って小さく頭を下げた後、続いてはシェロンの方へ歩み寄った。
「シェロン様も、お疲れ様です」
「お、サンキュー」
ドリンクを受け取ったシェロンは、さっそくボトルを煽って一息つくと、すぐさま『ノア』の方へと振り向いた。

「それにしても、あんた優秀じゃん」
「優秀？　私がですか……？」
　シェロンの言葉に、ノアは小さく首を傾げた。
「そうそう。情報処理のスピードも精度もあたしより上みたいだし、いっそのこと、あたしと立場代わってくんないかな？」
「？」
「そんでもって、あたしは仕事せずに一日中ごろごろと過ごして、指揮官の脛をかじってのんびり定年を迎えたいなって……なんて、どうよ？」
（んー……それはちょっと）
　相手に何のメリットも示さず、シェロンは『ノア』にそんな提案をしてみせた。というか半世紀近くだらけるつもりなのだろうか……シェロンの話す人生設計に、指揮官は苦笑した。
「指揮官には聞いてないよ。あ、じゃあいっそのこと……あたしにこの島の管理を任せてみない？」
「私の代わりに……ですか？」
「そうそう。で、どうよ？」
「申し訳ありませんが、それは出来かねます」
「まあまあ、そこを何とか！」
「……」
　シェロンの言葉に、『ノア』は小さく息を吐いた。
「残念ですが、この箱……いえ『島』は、私なしで管理することは出来ません。そのように設計されているので……それに、私にはこの『島』を離れられない事情がありますので」
「あ、そう。まあ、そんなに上手い話はないよねー」
　シェロンはがっくりと肩を落とした。
　どうやら割と本気なようだった。
（というか、ここにはシェロンの好きなジュースもないけどいいの？
　お菓子にマンガやゲームの新作だってそうだし、海のど真ん中だから配達も無理だし……）
「あ、そういやそうだったね～」

指揮官の言葉に、シェロンはハッとなった。
「もう一つ付け加えると、この『島』は地下から特殊な磁場が放出されていますので、特殊な回線でも使わない限り、通信環境が非常に悪いです。なのでインターネットにも繋がりません」
「え、マジで？」
「まじです」
「そっか、じゃあいいや」
さらに『ノア』が付け加えると、シェロンは『島』の管理に対して完全に興味を失ったように、その場で肩をすくめてみせた。
（というか、今の職場に何か不満が？）
「いやー？　指揮官のところで適当にやるだけでお金が貰えるっていうんだったら、特に不満はないかなー。管理人になりたいって言ったのは、ちょっと言ってみただけー」
（さいですか）
小さく咳をして、指揮官は『ノア』に視線を移した。
（まあとにかく、ノアが居てくれたおかげで本当に助かったよ。仕事がかなり捗ったというか……）
「そうでしょうか」
（本当本当。２人だけじゃ、２～３時間くらいかかってもおかしくなかった量だったし……浮いた時間の分、ゆっくり出来そうだよ。ありがとう）
「そうですか、それは何よりです。ただ……」
（ただ？）
「一つ言わせてもらいますと……先程から、シェロン様が主様をお手伝いしている場面を拝見させていただきましたが、シェロン様も十分に優秀なお方だとお見受けしました」
「え？　あたしが？」
それを聞いてシェロンが反応する。
「いやー、そんな事ないってー。あたしはただ、テキトーに指揮官の手伝いをしてるだけでさぁ、これくらい誰にだって出来ると思うよー？」

（確かに、シェロンは優秀だよ）
「むー、指揮官までそう言う……おだてても何も出ないんだからね？」
自分が優秀であることを軽く否定するシェロンに、指揮官は「おだてる訳じゃない」……と、続けた。

一見すると、パイロットの傭兵ランクや撃墜数、そして能力がものを言うこの業界だが、無論、それだけが全てではなかった。優秀なパイロットたちが多大な戦果をあげる裏側には、それを後押しする者たちの努力があってこそのことなのだ。
どんなに高性能な機体であっても、それを扱うものが未熟では意味がない。それは逆もまた然りである。
どんなに優秀なパイロットでも、使う機体がボロボロでは意味がない。故に、多くのパイロットは機体を修理する整備士を必要としている。
そして整備士は修理に必要な資源を得る為に、それらの調達役の存在が必要不可欠であり、その調達役もまた、仕事を取り仕切る上の人間を必要としている。
そんな彼らを統率する最上位の存在である指揮官もまた、彼らの存在があって始めて指揮官であることが出来た。それは傭兵業に限った話ではなく、このように『他の誰かを必要とする』サイクルがあってこそ、世界は回り続けることが出来るのだ。
ベカスや黒騎士など、高い戦闘能力や強力なスキル・ステータスを持った者たちだけが優秀という訳ではない。
肝要なのは、このサイクルの中で自分に何が出来るかということだ。
その中で誰かに必要とされ、自分の力をしっかりと把握し、自分に出来ることやっている……そういう意味でも、シェロンもまた優秀な人材であると言えた。

（シェロンには常日頃から仕事を手伝って貰ってるし、たまに基地司令代理を任せる事があっても、何だかんだ言いつつもしっかりと代理

の役割を果たしてくれる辺り、優秀だなって……）
「それは、押し付けられたから仕方なく……」
（それに……せっかくのバカンスなんだから、いつもみたく部屋でゲームしたり、みんなと一緒に海で遊んでてもいいのにさ。押し付けた訳でもなく、こうして仕事に付き合ってくれるところもね。だからシェロンがウチに来てくれて、本当に良かったって思ってる）
「それは……だって、指揮官のことほっとけなかったっていうか……ただの気まぐれでやってただけだし……」
（その気まぐれがとっても嬉しいよ。シェロン、ありがと）
「ッッッ……ど、どういたしまして！」
　気恥ずかしそうにしながら、そう言ってシェロンは指揮官から視線を逸らすようにして顔を背けた。
「なるほど。一つ宜しいでしょうか」
（何かな、ノア？）
「先程から主様とシェロン様のやり取りを見ていて気づいたのですが、お2人の相性は大変宜しいようにお見受けしました」
「～～～っ!?」
『ノア』の言葉に、シェロンは珍しく赤くなった。
（まあ、長い付き合いだからね）
　指揮官は最初の頃を懐かしむようにそう告げた。
「べっ……別に、指揮官の為にやってる訳じゃないから！　あたしはただ、自分が楽をしたいから指揮官のところにいるだけで、相性が良いって言われても全然嬉しくなんて……」
「なるほど、これがつんでれというものですか」
「っ!?」
　最早、何を言ってもボロが出るだけということに気づいたシェロンは咳払いを一つして、気を取り直したかのように指揮官へと視線を送った。
「ほんっと、調子狂う……こんなんあたしのキャラじゃないから！　あーもうッ！　指揮官、仕事終わったんならさっさと遊びに行くよ！」

（そうだね、水着に着替えたら行こうか）
シェロンの言葉に頷き、指揮官はコントロールルームを出ようと椅子から立ち上がった。
（ノア、みんなが今どうしてるか分かる？）
「お調べしますか？」
（お願い）
「分かりました。」
ビーチへ行く前に、みんなの状況が知りたかった指揮官が『ノア』にそう尋ねると、彼女は小さく頷いて目を瞑った。
すると、彼女の周囲に青白い光で形成されたアンテナのようなものが浮かび上がり、そこから目に見えない何かが放出され始めた。
「レーダーを使ってお調べします。少々お待ちを……」
「え、すごーい。そんな事もできんだ」
『ノア』の体が不思議な光に包まれ、神秘的とも呼べるその光景を、すぐ隣で見ていたシェロンが感心したような声をあげるが……
「ぴこーん、ぴこーん、ぴこーん」

突然、『ノア』の口から間の抜けたような声が出た。
「え？」
シェロンは思わず疑問符を浮かべた。
「ぴこーん、ぴこーん……」
その間も『ノア』は、あたかも自分はレーダーであるかのように振る舞い、いかにもレーダーっぽい擬音を口にし続けている。その光景は……本人は至って真面目な顔をしているが、その分とてもシュールなものだった。
「え、何……ちょっと怖いんだけど……」
「お気になさらず。ぴこーん、ぴこーん……」
「あー……なるほど。その『ぴこーんぴこーん』ってので人の居場所を探り当ててるってことね。音を反響させるなりして……」
「いえ、こうすればレーダーっぽいかと思いまして、気分的に……」

「ええ……？　意味ないんかーい」
　それから少しして、例の『ぴこーんぴこーん』というレーダーっぽい擬音が聞こえなくなると、『ノア』の周囲からアンテナがフッとかき消え、彼女は指揮官の前でゆっくりと目を開けた。
（どう、分かった？）
「はい。ノアちゃんレーダーによりますと、皆さま勢力ごとに分かれて身内同士で遊ばれているようです。見た限りではありますが、特に争っているような雰囲気は感じられませんでした」
「ノアちゃんて」
　シェロンは小さくツッコミを入れた。
（そっか、ありがと）
「それでは主様、ごゆるりとお過ごし下さいませ」
　指揮官がお礼を告げると、『ノア』はいつも通りの無表情で小さく頭を下げた。

ーーーーーー

　その後、水着に着替えた指揮官は改めてシェロンを海に誘いに行くも、彼女は持ってきた携帯ゲーム機をいじり始めて止まらなくなっていたので、仕方なく、1人でビーチに向かうこととなった。
　洋館からビーチへと続く森の小道に入ると、木々の間をすり抜ける涼しげな風と、独特な静謐さが指揮官の体を包み込んだ。さらに歩みを進めると、海側に近づいているのか、涼しげな風の中に潮の香りが入り混じるようになり、静謐さの奥に波の音が聞こえてくるようになった。
　森の小道を通り抜けてビーチへと辿り着くと、指揮官の目の前に、碧い輝きを放つ大海原が現れた。
　白い砂浜、穏やかに押し寄せる白波、どこまでも続く水平線、遠くの方には巨大な積乱雲が立ち込め、その一方で『島』の周囲は晴れきっ

ており、蒼く澄んだ美しい空が広がっていた。
砂は踏みしめるたびに心地よい音が鳴り、波の音と合わさると夏らしいハーモニーを奏でられているようだった。さらに海側から吹き付ける涼しげな風は心地よく、夏特有の強烈な日差しも気にならない程である。
（……ん）
海に出た指揮官は、しばらく周囲の情景を楽しんでいると、波や海風の音に混じって、遠くから少年少女たちの楽しそうな声が聞こえてくることに気づいた。
指揮官がその場所に目を向けると、すぐ近くでビーチバレーが行われているのが見えた。
「シャロ、お願い！」
「分かった！　ちょいさ！」
「龍馬、そっち行ったわ！」
「任せて！　やっ！」
簡易的なものではあるものの、砂浜にポールを立ててネットを取り付け、アルトとシャロ、龍馬と曦夜……と、チームに分かれて試合が行われていた。
審判はグルミが務めているようで、コートの外に置かれた椅子に座り、真剣そうな眼差しで試合の行く末を見守っていた。
「あ、先生！　おーい！」
そんな5人の元へ指揮官が近づくと、試合をやっていた内の1人……高橋龍馬が指揮官の存在に気付き、試合中であるにもかかわらず手を振り始めた。
「先生！　こっちこっちー！　うわっ!?」
だが、よそ見をしてしまったことで、龍馬は自分の方に向かってきたボールの存在に気づかず、龍馬の肩に当たったボールは勢いよく跳ね、そのまま海の方へ転がってしまった。
「赤チーム、ポイント」
「やった！」
「シャロ、ナイスだよ！」

グルミが得点を告げると、赤チームのシャロとアルトは嬉しそうにハイタッチし合った。
「ちょっと！　何よそ見してんのよ！」
「あはは……ごめんね」
「もう！　あんたのせいなんだから、さっさとボール取ってきなさいよね！」
「うん、わかったー」
　青チームの曦夜は龍馬のミスに小さく怒りつつ、海まで転がったボールを取ってくるよう言い放った。
（龍馬くん、邪魔してごめんね）
「ううん、先生のせいじゃないよー。そういう訳だから、ボール取ってくるねー」
（うん、気をつけてね）
　龍馬の後ろ姿を見送ってから、指揮官は続けてバレーボールをしていた４人へと振り返った。
（４人とも、楽しんでる？）
「指揮官！　とっても楽しんでるよぅ♪」
　指揮官の問いに、まず始めに応えたのはシャロだった。表情と声色からして、とても機嫌が良さそうだった。
「指揮官もやらない？　楽しいよ！」
「どうせデスクワークばかりで運動不足なんでしょ、だったら少しくらい参加しなさいよ！」
　続いて、アルトと曦夜が指揮官をバレーボールに誘ってきた。それを聞いて、指揮官はシェロンに運動不足を言えた口じゃないなと改めて実感するのだった。
（ん……そうだね、じゃあ一試合だけ）
　少しだけ参加することを決めた指揮官は、ひとまず今行われている試合が終わるまで待っていようと、コートの外にいるグルミの隣に移動した。
（グルミ、副審はご入り用？）
「いや、１人でも大丈夫そうだ。この試合が終わるまでその辺りで

ゆっくりしていてくれ」
　そんな言葉を交わし、指揮官が砂浜に腰を落ち着けると……何やらコートの方で騒がしくなっていることに気づいた。
「っていうかシャロ！　あんた卑怯なマネしてポイント稼いだ癖に、何そんなに喜んでるのよ」
「いやいやいや！　卑怯なんかじゃない！　これは作戦なの！」
　見ると、シャロと曦夜が言い争いをしていた。
「作戦？　人の隙をつくことのどこが作戦って言いたいわけ？　それとも何、普通にやってちゃ勝てないからって、こんな卑怯なやり方でポイントを稼ぐのがあんたの作戦って訳なの？」
「はぁ!?　ポイント取られたのはそっちのミスが原因でしょうが！　弱いからって変ないちゃもん付けないでよ！」
「何よ、シャロの癖に！」
「何よ！　曦夜！」
　……なんでこの２人はしょっちゅう喧嘩するかなー
　そう思いながら指揮官がコートの中を見ていると、言い争いを止めるべく、勇敢にもアルトが２人の間に入っていった。
「ま、まあまあ……２人とも落ち着いて……」
「うっさい!!!」
「……すみません」
　……こういう時は息ぴったりなんだけどなー
　２人の激しい剣幕に、思わず引き下がってしまったアルトは、指揮官へと目配せして助けを求めてきた。
　２人の争いを止めるべく、立ち上がろうとした指揮官だったが、その途中でグルミに腕を掴まれて止められる。
「僕が行こう、こういう時のための審判なんだろ」
（ん……じゃあ、お願いね）
「了解だ。おい……２人とも、そこまでだ」
　審判の席を立ったグルミは、そのまま言い争いをする２人の元へと駆け寄った。そんなグルミの後ろ姿に頼もしいものを感じつつ、指揮官はふと海の方へ視線を向けた。

（そういえば龍馬くん、遅いな……）
海側に転がったボールを追いかけて行ったまま、なかなか帰ってこない龍馬の姿を探すと、すぐに彼の姿を見つけることが出来た。
彼はちょうど、プカプカと波間を漂うボールに泳ぎ着いたところだった。掴み損ねないようボールを大事そうに抱えた龍馬は、それをビート板がわりにして浜辺側へ泳ぎ始め……
（……え？）
次の瞬間、指揮官の視界から龍馬の姿が消えた。
少し遅れて、浮力を持ったボールが海の中から飛び出してくるのが見えた。
（龍馬くん！）
最悪の事態を想定した指揮官の動きは早かった。
上着を脱ぎ捨て、それから自身にブーストをかけ、一瞬にして龍馬の姿が消えた地点まで移動すると、そのまま海中へ身を投じた。
海中で何やらもがくようにしている龍馬を見つけると、指揮官はその体を抱きしめるようにして掴み、海面に顔を出した。
「ぷはっ……」
（龍馬くん、大丈夫!?）
「はぁ……はぁ……僕は大丈……ひゃあああ!?」
（……!?）
溺れかけた龍馬を救出して、指揮官がほっと息をつこうとした時だった。突然、指揮官の腕の中で龍馬は悲鳴をあげた。
その只ならぬ様子に戸惑った指揮官だったが、何やら海中に龍馬以外の何者かの存在を感じて下を見ると、うっすらと彼の下半身に何かが張り付いているのが見えた。
「え……え？」
それは龍馬の体からゆっくりと離れ、まもなく2人の目の前に浮かび上がった。赤い皮膚、柔軟な8本の脚、そして吸盤……
「あ……僕の水着……」
（タコ……？）
それは……大きなタコだった。

波間に漂うその姿は、まるで赤いボールが浮かんでいるかのようで……さらに、どういうわけか龍馬がつい先ほどまで着ていた水着を抱えるようにして、８本の触手で大事そうに保持していた。
その場でしばらく見つめ合うようにしていた２人と１匹だったが、やがてタコは指揮官たちに興味をなくしたかのように潜水し、まもなく海中に消えてしまった。
（龍馬くん……立てる？）
「うん……って、足ついたんだ」
龍馬はきょとんとしたように海底を見つめた。どうやら先ほどのタコに襲われたことでパニックに陥ってしまい、正常な判断が出来なかったのだろう。
「先生、ごめんね……」
（いや、いいよ……それよりも、前隠してね）
「うん……うぅ、恥ずかしいよぉ……」
龍馬は顔を赤くして、丸出しになってしまった部分を手で隠した。
（というか、その……なんで女の子用の水着を？）
「ええ!? 先生、今更……？」
（……とりあえず、陸に上がろうか）
タコに水着を持っていかれ、生まれたままの姿になってしまった龍馬を引き連れて、指揮官が浜辺に辿り着いた時だった……
「きゃあああああああ!!?」
どこからともなく少女の悲鳴が響き渡った。
指揮官が声のする方に目をやると、悲鳴はちょうど５人がビーチバレーをやっていたところから聞こえていた。
「な……何よ、これ!?」
シャロがタコに絡まれていた。
しかも、タコの触手には龍馬の水着が挟まっており、その個体が先ほどの龍馬を襲ったものと同一のものであることが分かる。
触手についた吸盤を利用して、タコはシャロの上半身まで上った。シャロはタコを振るい落とそうと必死にもがくも、吸盤の力は凄まじく、１人の力では振り払えないようだった。

「し……シャロ!?」
「なんだこれ……タコ？」
「うえっ……デビルフィッシュとか気持ち悪……」
　海から離れた砂浜に突如として姿を現した大きなタコを、アルト、グルミ、曦夜の３人は怪訝そうな目で見つめた。
「い……いいからさっさと助けてよ！　ひゃああ!?」
「あ……ごめん！」
　シャロの叫び声にハッと我に帰ったアルトは、慌てて彼女の元へ駆け寄ると、タコを掴んで引き剥がしにかかった。しかし、タコのヌメヌメとした皮膚はいくら掴んでも滑ってしまうようで、なかなか引き剥がせないでいる。
「ア……アルト！　早く引き剥がしてよ！」
「そ……そう言われても、コイツ滑って……」
「変なとこ見るな！　変態アルト！　スケベ！」
「み、見るなんてそんなこと……」
「早くしてよ！　そうしないと……ひゃん！　こ……このタコ、触手の感触が気持ち悪くて、しかも水着の中に入って……うぇぇ……なんか水着脱がそうとしてるんだけど!?」
「もう少し……もう少しで……やっ！」
　やっとの事で、シャロの水着に絡みついていた触手を引き剥がすことに成功したアルトだったが……
「うわっ！」
　勢い余って、アルトは後ろから砂浜に転倒してしまった。しかも、彼の災難はそれだけに留まらず……チラリとアルトの顔を見たタコは、今度はアルトの体に纏わりつき始め……
「うぐっ……触手が、気持ち悪い……」
　タコの触手が胸板に張り付き、そのあまりの気持ち悪さにアルトの口からくぐもった悲鳴が漏れる。アルトの体に触手を這わせるタコの動きは、まるでアルトの体から水着を探しているかのようだった。
「アルトくん!?　まずい……助けないと！」
「ちょっと!?　あいつ何やってのよ！」

それを見たグルミと曦夜は、慌ててアルトの元へと駆け寄った。
「この……アルトくんから離れろ！」
「離れなさい！　このエロタコ！」
「え……なんかあたしの時と反応違くない……？」
「何……!?」
「こいつ、逃げた……!?」
グルミと曦夜がタコに掴みかかろうとしたその時……どういうわけか、タコは自分からアルトの元を離れると、3人から距離を置くようにしてサッと飛び退いた。
それからタコは、急いで水着のズレを直すシャロと、砂浜に倒れたアルト、そして臨戦態勢を取るグルミと曦夜を見回し……まるでため息を吐くかのように触手を動かすと、砂浜を走り去ってそのまま海の中へ消えてしまった。
「えっと……」
「今の……何なのよ？」
シャロと曦夜は、つい先ほどまでの言い争いなど、まるでなかったかのようにお互いに目を見合わせた。
「アルトくん、大丈夫かい？」
「うん、なんとかね……」
グルミの手を借りるようにしてアルトは身を起こした。それから親切なことに、グルミはアルトの体についた砂を手で払い落とし始める……
（4人とも、大丈夫!?）
そこへ、指揮官が駆けつけた。
「指揮官。見ての通り、犠牲はシャロだけよ」
「生きてるよ！」
曦夜の言葉にシャロがツッコミを入れる。
（そっか……惜しい人を亡くしたね）
「指揮官まで!?」

（まあ冗談はこれくらいにして……こっちは龍馬くんがやられたよ）
４人の視線が指揮官の隣に立つ龍馬に向けられた。つい先ほどまで丸裸だったものの、流石にこのままという訳にもいかなかった為、指揮官は自身の上着を彼に羽織らせ、大切な部分が見えないようにしてあげていた。
「うぅ……僕なんかの為に、せっかくベカスが用意してくれた水着だったのに……」
「り……龍馬くんの水着が取られた……？　あ、そういえば、さっきシャロはタコに水着を脱がされそうになってるって言ってたような……」
「う、うん……確かに水着を凄い力で引っ張ってきてたから、そんな風に感じたんだけど……」
「そういえばさっきアルトの体にタコが絡みついた時も、何となくだけどアルトの水着を探しているような感じではあったわね……」
（あのタコ……なんなんだろうね？）
先ほどのタコについて話し合っている時だった。
「ん……」
指揮官はそこで、グルミが何か言いたげな表情をしていることに気づいた。
（グルミ、どうかした？）
「いや、ちょっと思い出したことがあってな……」
（思い出したこと？）
「ああ。僕は以前、シーギガント号の船員から勧められて『超弩級少女』（実際にあります）っていう日ノ丸の漫画を読んだことがあって。その中で、これと似たような話があったのを思い出してね……」
（それは……？）
「要約するとだな……ある日、主人公たちが海に遊びに行くんだが……そこへ海から巨大なタコが現れて、襲いかかるかと思いきや、何故かヒロインや他の海水浴客たち（女性）から水着を奪って持ち去るという展開の話があってだな……」
「それって……今の状況と似てるわ!?」

グルミの説明を聞き、曦夜はハッとなった。
「だから……まさかとは思うが、今回のこれもつまりそういうことなんじゃないかと思ってな……いや、あまりにもナンセンスな話だってことは僕自身、重々承知してはいるが……」
（だけど、現に龍馬くんの水着が奪われちゃったことだし……その可能性はないとは言い切れないよね。多分……）
グルミの言葉に指揮官は頷きを返すも、水着を盗むタコなんて……そんな事ある？　と、内心は疑問符でいっぱいになっていた。
「あの……僕、女の子じゃないんだけど……」
「ぼ、僕もだよ……」
龍馬とアルトが控え気味に声を上げる。
（ん、知ってる。だからつまり、グルミが読んだ漫画とは少し違って、男の子の水着を盗もうとするタコなんだと……いや、シャロも襲われてたことを考えると、無差別ということになるのかな？）
「趣味の悪いエロタコね」
「一刻も早く捕まえないと！」
曦夜とシャロは不快感を示しながら頷きあった。
（だったら……）
指揮官はタコが消えた方向に視線を送った。
それはビーチの奥へと続いており、その先には機械教廷の面々やヴァルハラ一行など、タコの存在を知らない参加者たちがいるはずだった。
いくらタコが俊敏とはいえ、精鋭や武人揃いの参加者たちが遅れを取るとは思えなかったものの……龍馬が溺れかけたという前例があるため、油断はできなかった。
（グルミ、龍馬くんのことお願い）
「ん……ああ。それは構わないが、指揮官はどうするんだ？」
（とりあえず他のみんなに注意喚起をしてくる。今のところ、水着を盗むってだけで危険性はあまりないみたいだけど……一応、念の為にね）
「分かった。ここは僕に任せてくれ」

グルミとそんな言葉を交わした後、指揮官はその場の少年少女たちにビーチでは集団行動をするように義務付けると、他の参加者たちの姿を探してビーチの奥へと進んだ。

第２話へ続く……

第2話：ヴァルハラ勢と魔のスイカ割り

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第2話：ヴァルハラ勢と魔のスイカ割り

突如として出現したタコに龍馬の水着が盗まれてから数分後……指揮官は他の参加者たちを探してビーチを進んでいた。

（ん……この声は……）
しばらく歩いていると、どこからともなくテンション高めな女の子の声が聞こえてくることに気づき、指揮官はその場所へと足を向けた。
（やっぱり、キラスターだ……おーい）
「んぅ？　あ、指揮官だー、やっほーーー☆」
海から少し離れた木陰にキラスターの姿があった。指揮官が手を振って呼びかけると、キラスターはブンブンと手を振り回して返事をした。
「指揮官……？」
しかも、木陰にいるのはキラスターだけではないようで……指揮官の声に反応して、キラスターの隣で涼んでいた4人の参加者たちも一斉に視線を向けた。
（ああ……トリスタ様にレイア様、アルセール様にリンダまで、ご一緒でしたか）
そこには、ヴァルハラ同盟に所属する3人の女大公と魔剣使いの姿があった。5人ともつい先ほどまで海水浴を楽しんでいたのだろう、水着姿の彼女たちの体は海水で濡れていた。
「君か。よもやこんなところで出会うとは」
急ぎ足で5人の元へ駆け寄った指揮官のことを、ヴァルハラ同盟を代表するかのようにしてグラン公国の女大公・トリスタが出迎えた。
（トリスタ様、ご気分のほどはいかがです？）
指揮官はトリスタの前に膝をつき、そう尋ねた。

「いや、悪くはないな。雪国のヴァルハラとは違って、ここは日差しが強い分、風がとても心地よく感じられる……それにこの景色だって、ヴァルハラに居るだけでは到底見ることの出来ないものだ」
　トリスタはそう言って、目の前に広がる大海原を示した。
「穏やかに押し寄せる波の音色が、これ程まで心地よいと思ったのはこれが初めてだ。それもこれも、君がわたくしたちをここに連れて来てくれたからこそ感じる事が出来たのだろう……君には本当に感謝しているよ」
（光栄です）
「うん、楽にしてくれ」
　砂浜に膝をついた状態で頭を下げる指揮官へ、トリスタはそう告げた。
「その、ごめんなさいね……押しかけるような形になっちゃったと思うんだけど」
　指揮官が立ち上がると、イビルング公国の女大公・レイアが少しだけ申し訳なさそうな顔をしてそう言ってきた。
（いえ、そんなことはありません。むしろお忙しい中、来て下さっただけでも身に余る光栄と言いますか……何もないですが、ごゆるりとお過ごし頂ければ幸いです）
「そう、なら良かったわ。良い気晴らしをありがとう、君の心遣いを無下にしてしまわないよう精一杯楽しませて貰うわね」
　レイアは親しみのこもった笑みを浮かべた。
「指揮官、私からも礼を言わせてくれ」
　続いて、グングニル公国の女大公・アルセールがそう言ってきた。
「此度は、このような場にお招きいただき感謝いたします。慣れ親しんだグングニルの寒さもいいですが、暖かな気候というのも偶にはいいものですね！」
（そう言って頂けると、ご招待した甲斐があります）
「ああ、それと……ミョルニルから1つ言伝がある」
（言伝？　アン様から？）
　アルセールがミョルニルと呼ぶ、ミョルニル公国の女大公・アンは、

諸事情により今回の海水浴に来れなかった内の1人だった。
　最も、国の主であり多忙な日々に追われる彼女たちをヴァルハラの外へ連れ出すことが出来る機会など、指揮官の力を持ってしても難しい話なのだが……
「そうだ。『話は聞いている、ウチのキラスターが迷惑をかけたようね。今回、私は行けないから、代わりにキラスターをしばらくの間、貴方の下につけたいと思う。迷惑をかけたお詫びと思って、彼女のことをこき使ってあげて頂戴』……とのことです」
「ええ!?」
　すると、すぐ近くにいたキラスターが反応した。
「……というわけだ。君は元々メイドなんだろう？　ミョルニル直々の命令なんだから、指揮官の役に立てるよう精一杯頑張るといい」
「姫様、なんでぇ……？」
　キラスターは納得がいかないような顔になった。
（……えっと、よろしくね？）
　ミョルニル公国の女大公が、自分の為を思ってわざわざ申し出てくれたこともあり、流石に断る訳にはいかなかった。
　とりあえずキラスターへ手を差し伸べた指揮官だったが、彼女は何故か指揮官の前から素早く飛び退いた。
「あたしのこと油断させようったって、そうはいかないんだから！」
（え？　油断……？）
「そうやってあたしを油断させて、いつかエッチなことする気でしょ!?　姫様の命令だから逆らえないのをいいことに、あたしに変な服とか着せたり、あられもないポーズを取らせたりして……」
（それって、いつも自分でやってることでは？）
　指揮官はそこでキラスターとの出来事を振り返った。
　浴衣を着ければ大きく着崩し、しかも大股開きでパンツを丸見えにし……ハロウィンの仮装ではサキュバスという色々とアレな格好をして指揮官を慌てさせ、極め付けはクリスマスにリボン（略）という……
「うっさい！　そうして、あたしの熟れたナイスバディーを好き勝手

お触りして、汚れた欲望を膨らませてあたしのこと傷物にする気なんでしょう!?　エロ同人みたいに！」
（しないから！）

ーーー
［キラスターがパーティに加わった！］
ーーー

（それで、リンダも一緒だったんだ）
「……ん」
最後に、指揮官はヴァルハラ一行の陰に隠れるようにして後ろの方にいたリンダへと声をかけた。彼女は、今は亡きティルヴィング公国唯一の生き残りである。
（どう？　少しは楽しめてる？）
「……うん。楽しい」
（そっか）
視線を逸らしてボソボソと呟くように話すリンダだったが、レイアとの距離が前に見た時よりも少し縮まっていることに気づき、指揮官は心の中で安心するものを感じた。
「実は、去年のクリスマス以来……少しずつ会うようになっているの」
指揮官の視線に気づいたのか、レイアがそう答えた。
レイアが治めるイビルング公国は過去、リンダの属していたティルヴィング公国から激しい侵攻を受けており……その為、ティルヴィングが滅亡した後も、つい最近までこの２人の仲は険悪だった。
しかし、それも昔の話……
指揮官の仲介もあり、少しずつだがお互いを理解し合えるようになって、今ではレイアの方からリンダをイビルングの晩餐会に誘うようになってきたのだという……
「レイア、私に優しくしてくれる……」

レイアの言葉を肯定するかのように、リンダは指先同士をチョンチョンとしつつ、そう呟いた。
（レイア様……）
「ん……そう大したことじゃないわ」
指揮官の視線に、レイアは小さく微笑んだ。
「彼女を晩餐会に誘ったのは……ただ、私の祖国がどういうところなのかを知って貰いたかったからなの。その地に生きる人々の暮らし、穫れる農作物、見える景色、巡る風、似ているようで違う空の色、貴方の隣にいるのはこういう存在なのだと伝えたかったの……かつての敵としてではなく、今を生きる1人の友人として」
「レイア……」
「勿論、クリスマスのお返しという意味もあるけどね♪」
少しだけ表情の和らいだリンダに、レイアはお茶目に微笑んで見せた。
「フッ……甘いな」
そんな中で、1人嘲笑を浮かべる者がいた。
それはトリスタだった。
「レイア。君の掲げる立派な平和主義的思想にはわたしくも思わず脱帽するよ。だが、過度な馴れ合いが必ずしも平和に繋がるとは考えないことだ。自国の状態をオープンにすることは……それは時に、自国の弱みを相手に教えるということを意味している。それにつけ込んで敵国に攻め込むのは、戦いの常套手段であり常識なのだよ」
そう言ってリンダに鋭い視線を向けた。
「特に、ここにいる彼女は同盟の中でただ1人、祖国を滅ぼされた身であり、しかも魔剣の呪縛に囚われていると聞く。いつ寝首をかかれるか分からないゆえ、深入りしすぎないのが最良だと思うが？」
「……っ」
トリスタの言葉に何も言えず、リンダは項垂れかけるも……だが、そんな彼女を庇うようにレイアはトリスタの前へ立ちはだかった。
「確かに、貴方の言葉は間違っていない」
「うん？」

首を捻るトリスタに、レイアは静かに続ける。
「貴方も知っての通り……同盟の中でも、私の祖国は最も弱小よ。強大な武力を持つグランやミョルニルとは違って、次に大規模な戦争があれば、私たちもティルヴィングの後を追うことになるのは明らか……そんな状態で、自分の弱みを見せるということは自殺行為と思われても仕方ないわ」
レイアの瞳に強い光が映った。
「だからこそ……！」
強い意志を込めて、彼女は続ける……
「力を持たないなりに、私は別の手段で故郷を守ってみせるわ！　脅威を取り除くには、武力だけが手段ではない……これからの時代に必要なのは、これまでの武力に頼り切ったやり方ではなく、戦わずして祖国を守る方法なのよ」
「それでは、これまでのヴァルハラは間違っていたと……レイア、君はそう言いたいのか？」
「いいえ、間違ってはいないわ。何故なら、これまでは生き残る為に武力が必要だったからよ。でも、これから先の時代は必ずしもそうとは言い切れない。この世界は常に変化し続けている……その時流に惑わされないようにするのに必要なのは武力ではないわ」
「では教えてくれ、変化する世界の荒波に呑まれないようにする為には……一体何が必要なのかを……！」
「彼女よ！」
そう言って、レイアはリンダを示した。
「わ、私……？」
「そう。いえ、正確に言えば貴方のような存在が必要と言った方が正しいわね。ヴァルハラの中の一国という立場では、世界の時流を見極める事は出来ない……ならば、様々な角度から見れば良いということ。その為に私は祖国の民の立場になって考えるだけではなく、この世界に生ける多くの人を知り、考えを知り、思想を知り、そして境遇を知る必要があるの。だからこそ私は、その内の1人であるリンダのことを必要としている……言い換えれば、彼女は祖国を守るための

『鍵』になるから」
「私が……守る……『鍵』……？」
レイアの言葉に、リンダは少し戸惑った。
無理もない、祖国を滅ぼされてからというもの……目につくものを片っ端から破壊してきた彼女にとって、まさか自分がそんな役割を持っていたとは思ってもみなかったのだろう。
「多面的に見ることの重要さは、国同士の争いが起きた時にもその真価を発揮するわ。これまでのように、迫り来る脅威を武力を用いて排除するのではなく、逆に相手の立場に立って世界を様々な角度から俯瞰する……そうする事が出来れば、武力に頼らずとも解決策を見い出す事が出来る」
「甘いな。そんなことができるものか！」
「それはやってみないと分からなくて？」
「自信があるようだな。ならば刮目させて貰おうか」
間に鋭いものを走らせ、
トリスタとレイアは無言で見つめ合った。
「……まあまあ、２人ともそこまでです」
すると、一触即発な２人の間に、落ち着いたような表情でアルセールが割って入った。
「せっかく指揮官が用意してくださった憩いの場です。このようなところで、わざわざ小難しい討論をする必要もありませんし、ヴァルハラに戻ってからでも良いではないですか」
「……」
涼しげな笑みを伴ったアルセールの言葉に、トリスタとレイアは改めて顔を見合わせ……
「少し熱くなり過ぎたか」
「そうね。頭を冷やしましょう……」
高まっていた緊張を解すかのように小さく息を吐く２人を見て、指揮官も思わず安堵のため息を漏らすのだった。
「ねぇ、リンダ」
レイアはリンダへと振り返った。

「私はもう、ティルヴィングの悲劇を繰り返したくはないの。争いはもう沢山……だから、これからの世界を生き残る為に、共に生きる未来を作るために、私に力を貸して欲しい」
「……」
　レイアの言葉に、リンダは少しだけ考え……
「今まで、私のこと……必要だって、言ってくれたの……指揮官と、レイア……だけ。だから……嬉しい……少しだけ」
「じゃあ……！」
「……っ……レイアの、イビルング、いいところ……守りたい……わ、私で……よければ」
「……ありがとう、リンダ」

　祖国を侵略された者
　そして、祖国を滅ぼされた者
　どう取り繕っても、２人の間にあるその現実が消えることはない。だが、それでも前に進み続けなければならない……それが、多くの犠牲を経て得られたものであるのなら、尚更。
　いつの日か、２人が心の底から分かり合える日が来ることを……指揮官は密かに願うのだった。

「ところで指揮官殿。何か私たちに用があったのではないですか？」
（ああ、そうだった……！）
　アルセールに言われ、指揮官はハッとなった。
　レイアたちの言葉に耳を傾け、思わず『水着を盗むタコ』のことを失念していた指揮官は、そこで改めて、ヴァルハラ出身の５人にそれを伝えるのだった。
「タコ……ですか」
（ええ。水着を盗もうとする以外に特に危険性はないとは思いますが、念のため警戒していて下さい）
　首を傾げるアルセールたちへ、指揮官は警戒を促した。
「なるほどね！　水着を盗むことで、このあたしの熟れたナイスバ

ディーをポロリさせるつもりなのね！　なんて卑劣な……」
「まあ、それはいいとして……何故、そのタコは水着を盗もうとするのです？　まさか水着を食べるためというわけでもないでしょう」
　キラスターの言葉を遮ってそう聞いてきたアルセールに、指揮官は短く調査中だということを説明した。
（それでは、他のみんなにも伝えに行くので）
「あ、待ってください！　もう1つだけ……」
（どうかしました？）
「実は、これですが……」
　そう言ってアルセールが木の陰から取り出したのは……1本の木の棒と、大きなスイカだった。
「つい先程、参加者の1人だろうか……黒猫のような印象を受ける水着姿の少女から譲り受けたものなのですが……これをどうすればいいのか分からない。指揮官殿は何かご存知ですか？」
（黒猫……七瀬汐月？　何故これを？）
「いや、理由を聞こうとしたのですが……喋っている言葉が難しくて私には理解できませんでした。そこで指揮官殿は何か心当たりがないかと思いまして……」
　黒猫、水着姿、スイカ、そして難しい言葉……
　アルセールの言葉から、それが七瀬汐月で間違いないことに気づいた指揮官は……念のためにアルセールからスイカを受け取ると、ドアをノックする要領でコンコンと叩いてみた。
　そして反対側に伝わる振動と音の反響具合から、それが身のぎっしり詰まった最高級のスイカであることに気づいた。
　食べて欲しいのなら素直にそう言えばいいのに……汐月のヴァルハラ出身者たちに対する遠回しな好意に、指揮官は苦笑した。
「どうしました、指揮官殿？」
（いえ……何でもありません。それで、ヴァルハラの皆様はスイカ割りをしたことがないようですね）
「スイカ割り？」

指揮官はスイカ割りについて簡単に説明した。

「へぇ……これは食べ物なのね」

「グランにはない植物だ……」

指揮官の説明を聞くなり、レイアとトリスタは不思議そうな目でスイカを見つめた。本来、スイカやキュウリなどウリ科の植物は熱帯の植物でもあるため、北国出身の彼女たちにとっては物珍しいようだった。

「で……このスイカとやらを、一緒に渡された木の棒で叩き割れば良いと？」

「剣で切る方が……早そう……」

「そうだな。わざわざこんなもので叩かずとも、斬ったほうが……」

（まあまあ。手間だとは思いますが、それがスイカ割りの醍醐味ですので……まずはこれを使ってスイカ割りをしてみましょう）

それぞれ剣を取り出そうとしたアルセールとリンダを止め、指揮官はスイカ割りをする為に準備を始めた。少し離れた砂浜にスイカを設置し、キラスターから目隠し用のタオルを借りて、スイカ割りのルールを説明しつつ、お手本として木の棒をスイカに軽く叩きつけてみせた。

（……とまあ、こんな感じです）

「何でもいいから早くやってみようよ！　さっきはあたしも色々考えすぎちゃって、すっかりお腹へったー」

（それでは、順番を……あ）

そこで指揮官は、スイカ割りについて熱心に説明するあまり、ついタコのことを忘れてしまっていることに気づいた。

何が起こるか分からないこともあり、急いで他の参加者たちのところへ向かおうと一瞬だけ思うも、先ほどのトリスタとレイアのやり取りから、もう少しだけ2人の様子を見守っておきたいと考えるようになり、そのままスイカ割りに参加することにした。

6人でスイカ割りの順番を決めた結果……

最初にレイア、続いて指揮官、トリスタ、キラスター、リンダ、最

後にアルセールという順番になった。
「まずは私ね！」
　木の棒を手にし、目隠しを巻いたレイアが勇んでスイカの前に立った。
（レイア様、頑張って下さい）
「こういう暴力的なのは苦手だけど、やってみるわ！」
　指揮官たちの指示もあって、スイカに向かってゆっくりと歩き始めたレイアは、木の棒の間合いにスイカを捉えると、勢いよく振り下ろした。
「はあ！」
　見事、レイアはスイカの芯にヒットさせるも……
　しかし、スイカが割れることはなかった。
「うーん、やっぱり私の力では駄目ね」
（ですがダメージは入ったと思います。そもそも、一回で割れるようなものでもないので……お見事でした）
　指揮官はレイアから目隠しと木の棒を受け取って、先ほどと同じくスイカの前に立った。そして背後から聞こえてくる指示を頼りに、スイカに向かい始めた指揮官だったが……
「右だ」
「えっと……1時の方向、目標まで約2メートル」
「違う、右に２０度旋回だ」
「右、左……えっと、どっちが右だっけ？」
「もっと右！　次は左！　上下上下ＡＢＡＢ！　一回転！　はい、そこで大きくジャンプっ☆」
　背後から聞こえてくる指示は微妙に違いがあり、指揮官は頭の中でそれらを統合しようとするも……その内の1つは、明らかに惑わそうとしているのが目に見えていた。
（そこか！）
　なんとかスイカの位置を特定した指揮官は、勢いよく木の棒を振り下ろすも……スイカは思った以上に耐久性が高く、直撃したにも関わらず無傷だった。

（まあ、こんなもんかな）
「では、次はわたくしだな……はっ！　やったか？　……むぅ、駄目か」
　続いてトリスタが挑戦するも、スイカは割れず……
「こんなもの！　あたしのパワーで一撃よっ☆　たぁぁぁぁぁぁぁぁ!!……どうだー……って、全然割れてない!?」
　自信満々だったキラスターですら、スイカを割ることができなかった。
　……スイカ割り用に汐月が改造したのかな？
　キラスターの剛腕を持ってしても中々割れないスイカを見て、指揮官がそんな分析をしていると……ついにリンダの番がやってきた。
「リンダ、頑張って！」
「……うん」
　レイアの声援を受けて、リンダはゆっくりとスイカへ接近する。木の棒をしっかりと構えたリンダの体からは強烈なアトモスフィアが放たれ……
　その場にいた一同は、それだけでもスイカを切り裂いてしまうのではないかと思うほどの、鋭いプレッシャーを感じることができた。
「どうやら私の出番はなさそうですね」
　それを見て、スイカ割りを楽しみにしていたのだろう……ラストバッターのアルセールは残念そうに呟いた。
「そこだー！　思いっきり、いっちゃえーーー!!」
「思いっきり……？　うん……分かった……」
　リンダは背後から聞こえてきたキラスターの言葉に頷くと「痛みは……一瞬……」そう呟いて、彼女は魔剣の力を解放させた……
（……って！　ちょっ待……）
　指揮官が止める間もなく……リンダの持つ小さな木の棒が、全長60メートルの巨大な『大樹』へと変化した。もっとも、枝も葉もないのだが……
（ええ、そんなユグドラシルじゃあるまいし……）

「切るッッッ!!!」
リンダは『大樹』を大きく振りかぶり……
「まずい！　みんな避けろ！」
トリスタは絶叫した。
いつもの調子で大きく振りかぶってしまったことにより、リンダの背後にいた全員の真上に『大樹』が振り下ろされる形となった。
いち早くそれに気づくことができたトリスタ、アルセール、キラスターは迫り来る『大樹』から素早く飛び退くことが出来たものの……
「え？」
リンダの活躍を間近で見守っていたレイアだけは反応しきれず、その頭上に『大樹』の影が映り込み……
（レイア様！　間に合え……ッ！）
指揮官は自身にブーストをかけた。
そして、たった一瞬だけの超高速を発揮した指揮官はレイアを抱きしめると、勢いそのまま『大樹』の落下範囲から離脱することに成功……
まもなく猛烈な地響きと共に、『大樹』がつい先ほどまで2人のいた空間を押し潰した。
「……あああああああああッッッッ!!!!!」
次の瞬間……張り裂けそうな絶叫と共に、リンダは目の前のスイカめがけて『大樹』を思いっきり振り下ろした。
砂浜に衝突したその一撃は大地を抉り、前方に巨大な衝撃波を発生させ、衝撃波は砂浜を通って海の向こう側へと消えていった。
（レイア様、ご無事ですか？）
「は、はい……」
砂浜の上に倒れこむ形となった指揮官は、腕の中で丸くなっているレイアの無事を確認し、安堵のため息を吐いた。
これでもし、彼女がどこか怪我でも負っているのであれば、国際問

題に発展しかねなかった。
「あ、あの……」
（どうかしましたか!?　どこか痛みが……）
「その……ち、近くて……顔が……」
　レイアの顔は真っ赤に染まっていた。
　しかも、２人とも水着姿で密着している形となっている事もあり、お互いの温もりと肌の感触を直に感じられるようになっている。
（……失礼しました）
「い、いえ……その……ありがとう……」
　お互いに気まずくなり、体を離した後も、２人は視線を合わせることが出来なかった。
「指揮官、レイア、無事か！」
（トリスタ様……はい、大丈夫です）
「私も無事よ。心配かけたわね……そっちは」
「大丈夫。全員生きてます」
「生きてるよぉ☆」
　リンダのスイカ割りによって生じた砂煙が一帯を包み込む中、お互いに生存を報告し終えると、ちょうど海側から吹いてきた風が煙を森の方へと押し流し始めた。
　そして、目の前に広がる光景を見て……
　指揮官たちは言葉を失った。
「……レイア」
「な、なに……トリスタ……」
「君はこの光景を見ても、彼女が祖国を守る為の『鍵』になると言えるのか？」
「……ごめん、ちょっと自信なくなってきた」
　リンダのスイカ割りによって放たれた衝撃波は、先の砂浜を横断するようにして大きな亀裂を生み出し、遠くの方に見える海は真っ二つに割れていた。
「……？　……？」
　しかし、その当事者のリンダは目隠しをしていた事もあり、自分が

やった事を理解できていないようである。
「なるほど。生身の体でこれだけの威力を発揮することができるのは、良い抑止効果が期待できるな」
「違う……こんな筈では……」
目の前に広がる惨状を見て、リンダに対する考えを改めるトリスタに対し、レイアは複雑な気分になるのだった。
「うぅ……スイカぁ……食べてみたかったのに」
「大丈夫ですよ、キラスター。皆さん、スイカは無事です！　これでまたスイカ割りを再開できますよ！」
魔剣の能力により木の棒の当たり判定が大きくなった事で、逆に当たらなかったのだろう。砂浜に転がっていた無傷のスイカを拾い上げ、アルセールは嬉しそうな声をあげた。
（いや、今そんな気分では……というか、他の参加者たちに被害がないか心配なんだけど……）
被害状況を確認しようと、指揮官が動き始めた時だった。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ　ヒルダぁぁぁ!!!」
「髪が……私の髪がぁぁぁぁぁ……」

（……）
遠くから聞こえてきたその悲鳴に、指揮官は気が遠くなるのを感じるのだった。

リンダの放った衝撃波は、遠くの砂浜で相棒のケリーと共に砂風呂を楽しんでいたヒルダ（の頭頂部）を掠めるに至った。
命に別状はなかったものの、その結果、
ヒルダの頭髪はサイドを残して全て消失……
被害状況を確認すべく、慌てて駆けつけた指揮官が見たのは、頭頂部がハゲスキンヘッドになってしまったヒルダの輝かしい（）姿だった。

ハイライトの消えたヒルダの瞳
変わり果てた同僚の姿に怯えるケリー
無理もない、女性の命とも呼べる髪がなくなってしまったのだ。あまりの惨劇に見ていられなくなった指揮官は、とりあえず好感度アイテム『育毛剤』(ブラドレイ用)をヒルダの頭に塗ってあげることにした。
製造元がオスカー製薬(仮)だった事もあり『育毛剤』がヒルダにもたらした育毛効果は凄まじく、彼女は一瞬にしてハゲからアフロヘアーへの変貌を遂げ、どうにか事なきを得るのだった。
伸び過ぎた髪を切るべく、ヒルダはケリー共に洋館へ戻って行った。その後、(アルセールの手によって普通に割れた)極上のスイカをみんなで味わい、そうして指揮官はキラスターを引き連れ、他の参加者を探してまた歩き始めるのだった。

第3話へ続く……

第3話：真夏の幼女たち

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第3話：真夏の幼女たち

ヴァルハラ出身者たちと別れてから数分後……
『水着を盗むタコ』の脅威を伝えるべく、指揮官とキラスターは参加者の姿を探してビーチを進んでいた。

「ねーねー指揮官、あそこに誰かいるよー？」
（あれは……グニエーヴルたちだ。行ってみよう）
海辺で遊ぶ複数の人影を見つけた2人は、彼女たちの元へと足を運んだ。指揮官が近寄ると、そのうちの1人……グニエーヴルもそれに気づいたようで、小さく頭を下げた。
「指揮官」
（グニエーヴル。どう、楽しめてる？）
「はい、お陰様で楽しませて貰っています」
（それは良かった。あの子たちも楽しそうで何よりだよ）
指揮官は海側へと視線を向けた。
浅瀬のところで基地の年少組であるアイリとドリスが楽しそうに水かけっこをしており、さらに2人の周りにはウサギ型ペットのフィービーとモモ、そして数種類のアザラシ型ペットたちがそれに参加していた。
グニエーヴルはそれを見守っているのだろう。
水着姿ではあったものの、その体が濡れていないところを見ると、海に入るつもりはないようだった。
「あ！　指揮官様！」
（やあドリス、ペットは海水につけても平気？）
「大丈夫だよー！　このドリスちゃんが作った超高性能防水機能な

ら、海だけじゃなく汚い泥水の中に沈めたって平気なんだからー！
なんなら試してみよっかー？」
（いや、いいよ）
　ドリスの言葉を聞いたフィービーが露骨に嫌そうな顔をしていたのを見て、指揮官はその提案をやんわりと断ることにした。
「そう？　まあいっか、それよりも水かけっこ楽しいよ！　指揮官様も一緒にやろ！」
（あー……そうしたいのは山々なんだけど……）
『水着を盗むタコ』の脅威を伝えるべくビーチを回っていた指揮官は、今は遊んでいる場合じゃないと小さく首を振るも……
「水かけっこね！　やるやる!!!」
　隣にいたキラスターが嬉々として手を上げ、そのままジャブジャブと海の中へ入って行った。
（ん……まあ、少しだけね）
　きゃっきゃっ、と楽しそうに水かけっこをする3人を見て小さく微笑みつつ、指揮官はグニエーヴルへと振り返った。
「指揮官、どうかしましたか？」
（ごめん、楽しんでるところちょっといいかな）

　指揮官はそこで、当初の予定通り『水着を盗むタコ』についてグニエーヴルに説明した。

「なるほど……それは怖いですね」
（うん。今のところ水着を盗もうとする以外に悪さをすることはないみたいだけど……念のためにね）
「了解です」
　指揮官の言葉を不思議そうな顔をして聞きつつ、グニエーヴルはそこで何かを思い出したかのようにハッとした表情を浮かべた。
「あの、私からも1つ聞きたいことが……」
（何かな？）
「ベカスを見ませんでしたか？　洋館に入って、男女別に部屋を案内

される直前まではいたのですが……それ以来、ずっと姿が見えなくて」
（ベカスが？　ん……そういえば見てないね）
　そこで指揮官は、ベカスが高橋龍馬と一緒にいるところを見て以来、自分も彼の姿を見かけていないことを話した。
「はい……ですのでベカスと仲の良いウッドさんに聞いてみようと思ったのですが、あの人もまた姿が見えなくて……」
（そっか……まあ、小さい島だけど歩くには広過ぎるからね。せめてノアがいてくれれば分かるかもしれないけど……）
「ノア？」
（いや、何でもないよ……）
　指揮官が笑って誤魔化そうとした時だった。
「主様、お呼びですか？」
　ふと、背後に気配を感じて指揮官が振り返ると……いつからそこにいたのだろうか、指揮官の背中にぴったりと張り付くようにして『ノア』が佇んでいた。
「ふはぁあああ!?」
　何の前触れもなく、いきなり指揮官の背後に現れた小柄な少女を見て、グニエーヴルは思わず悲鳴をあげた。
「あ……貴方、いつからそこにいらっしゃったんです？」
「ついさっきです。それよりも、グニエーヴル様ですね」
「え……あ、はい……」
「申し遅れました。私は『ノア』と申します。僭越ながら、この『島』を管理させてもらっている者です」
「あ……これはどうも、ご丁寧に……」
　未だ戸惑いを隠しきれないグニエーヴルに対し『ノア』は簡潔に自己紹介を終えた後、改めて指揮官へと振り返った。
「それで主様、どういったご用件でしょう」
（人探しをお願いできるかな。名前はベカス・シャーナムっていう人なんだけど……あ、ついでにウッドっていう軍人のことも頼めるかな？）

「分かりました。少々お待ちください……」
そう言って『ノア』は洋館でシェロンに見せた時と同様に光のアンテナを展開し、例によって「ぴこーん、ぴこーん」とレーダーっぽい擬音をわざわざ口で再現してみせた。
「!?」
彼女のそんな様子を見て、グニエーヴルは驚きのあまり何も言うことができなかった。
やがて『ノア』はレーダーっぽい音を再現するのをやめると、頭上のアンテナを消滅させ、それから小さく息を吐いた。
(どう、分かった?)
「……はい、分かりました。ノアちゃんレーダーによりますと、お2人とも今は同じところにいるようです」
「それで、ベカスたちはいったいどこに?」
その言葉を聞くや否や『ノア』に向かってグニエーヴルはそう聞き返すも、相変わらずの無表情で『ノア』はグニエーヴルを見つめ返し……
「一つだけ言わせてもらいますと……グニエーヴル様。世の中には知らない方が幸せなこともあるというものです」
「え……えっと……それはどういう……」
「お2人のプライバシーに関することですので」
「ああ……それなら仕方ないですね」
そう言ってグニエーヴルは引き下がった。
自分はベカスにとって仲間以上の存在ではないのだから、彼のやる事なす事をとやかく言える立場ではない……その気持ちがどうしても出てしまい、なかなか前に進めないのだった。
(寂しい?)
「え……ええ、まあ……」
グニエーヴルは苦笑いを浮かべつつ、小さく頷いた。
「せっかくの休みなので、少しだけでも一緒にいられたらなって思いまして……欲を言えば、水着姿も見てもらいたかったですし……でも、私はあの子達の見守りをしないといけないから、どっちにしろ

ずっと一緒にはいられないと思っていましたから」
　グニエーヴルの視線の先には、浅瀬で楽しそうに水遊びをしているアイリとドリスの姿があった。２人とも、基地にいる時以上に楽しそうにしてくれている。
（ありがと、２人の見守り役を買って出てくれて）
「いえ、大したことではありません……ただ、そうですね。あの子達がとても楽しそうにしているところを見ていると、そこまで苦ではなくて……いえ、今ではむしろ、やってよかったなって思っています」
（そっか……それは何より。それじゃあ、みんなにタコのことを伝えて回るついでにベカスを見かけたら、ベカスにそれとなく伝えておくよ）
「お心遣い、感謝します」
　グニエーヴルは優しげに微笑むと、それから背後へと振り返った。
「あ、そうそう……先程はお手数を……え？」
（どうかした？）
「いえ……その……そういえばベカスのことを探してもらったお礼をまだ言えていなかったと思って、先程の方の姿を探しているのですが……」
（ノアのこと？）
「はい。ですが……いつのまにか、いなくなってしまって……」
　２人は周囲を見回してみるも、つい先ほどまでそこにいたはずの『ノア』の姿が忽然と姿を消していた。この辺り一帯は砂浜で、隠れられる場所などないというのに……
（……ん、大丈夫だと思うよ。グニエーヴルのその気持ちは、きっとあの子にも伝わってると思うから）
「でも、せめてひとことお礼を言いたかったのですが……」
（ここにいればまた会えると思うから、その時にね）
「はい、そうします」
　２人がそんな会話を交わしていると……
（……ん？）
　不意に、誰かから背中をつつかれる気配を感じて指揮官が振り返る

と、目の前にアイリがいた。その手には、小さなアザラシのペットを持っている。
「抱っこ……する？」
（抱っこ？　別にいいけど……）
「抱っこ、してみて」
（それじゃあ……よっと）
　アイリに言われるがまま、指揮官は小さな彼女のことを抱き上げた。
「ひゃあああああ!?」
（え……）
　すると、アイリはびっくりしたような声をあげた。
　少し勢いが強すぎたかな……指揮官がそう思っていると
「し、指揮官様……抱っこするのはアイリじゃなくて、アザラシさんのことだよ……」
（あ、そっち!?　ご、ごめんね……）
　勘違いしていたことに気づいた指揮官は、小さく謝ってアイリを砂浜に下ろそうとするのだが、なぜか片膝立ちの状態になってもアイリは指揮官の体から離れようとしなかった。
（どうしたの？）
「うん……やっぱり、このままがいい」
（そう？　じゃあ少しだけね）
「うん……♪」
　改めてアイリのことを抱っこした指揮官は、いつもより少しだけ高い視線を満喫させた後、さらに彼女を喜ばせるために砂浜の上でクルクルと回り始めた。
「きゃ～～～ぐるぐるだ～～～～♪」
　すると、アイリは指揮官の耳元でテーマパークのアトラクションに乗った時のような、可愛い悲鳴をあげた。
「きゅー……目の前がぐるぐるだよぉ……」
（大丈夫？）
「うん！　あ、指揮官様の顔が変に見える……」

（あはは、まだ目が回ってるみたいだね）
指揮官は小さく笑いつつ、アイリを砂浜に下ろそうとするが……それでもまだ遊び足りないのか、アイリはぶんぶんと首を横に振った。
「指揮官様……アイリ、まだ目が回ってるみたい」
（ん……じゃあ、今度は目が回らないように）
指揮官はそこで自身にブーストをかけ、アイリを抱っこしたままの状態で砂浜の上を超高速で駆け回り始めた。
「わー！　はやーい!!」
特殊な環境下で育ったこともあってＢＭの操縦技術を持つアイリは、そのため普通の子どもと比べると肝が据わっているのか、ジェットコースターの如き超高速の中でもご機嫌だった。
「アイアンヘッドよりもはやーい!!!」
（あはは……なんでアイヘ？）
鈍足なアイアンヘッドと比べられることに苦笑いを浮かべた指揮官だったが、まあアイリが楽しそうにしていればそれでいいか……と、最後はウォータースライダーの如く海の中に突っ込み、３回目のブーストを終了させた。
（どう？　楽しかった？）
「うん！　指揮官様、ありがとう」
巻き上げられた水しぶきの中で、２人は微笑み合った。満足げに笑うアイリを見ていると、指揮官もまた充実した気分になるのだった。
「指揮官様！　ドリスちゃんにもやってやって！」
「あたしもあたしもーーー!!!」
片膝をついてアイリを浅瀬に下ろしたところで、ドリスとキラスターが同時に指揮官の胸に飛び込んできた。
（ちょっ……２人同時は……ぐはっ!?）
小柄とはいえ勢いのついた２人の体を受け止める事はできず、指揮官は２人を抱えたまま後ろ側へと倒れ、盛大な水しぶきを上げるのだった。
「し、指揮官様……!?」
それを見て、アイリは目を丸くする。

「ぶへっ……口の中に塩水が……」
「もー、ちゃんと受け止めてよー！」
（あのね……）
浅瀬に倒れながらも、指揮官は自らがクッションになることでドリスとキラスターが怪我をしてしまうのを防いでいた。
しかし、指揮官のそんな気も知らず……2人は頭から海水を被りつつも、どこか楽しげな様子ではあった。
「あらあら……2人とも、指揮官様をあんまり困らせてはいけませんよー」
砂浜の方からグニエーヴルの声が聞こえた。
しかし、2人はまるで聞く耳を持たない。
「指揮官様！　さっきのグルグルやってよ！」
「そんじゃあ、あたしは速いやつね☆」
（ごめん、少し休ませて……）
先程のアトラクションに興味があるのか、2人は倒れた指揮官の腕を引っ張って起き上がらせようとするも……ブーストの最大連続使用によって生じた疲労感で、指揮官は動けなくなってしまっていた。
押し寄せる波が優しく体に打ち付けられる感覚、海面から出た皮膚に吹き付ける暖かな風、それらに身を委ねながら指揮官がふと空を見上げると、目の前には一面の青が広がっていた。まるで青いペンキの入ったバケツを、白いキャンバスの上にぶちまけたかのように……
「空って、こんなに青かったっけ……？」
「綺麗だねー。この青さは姫様のところじゃ見られないから、今の内に心の中に刻んでおくよ！」
指揮官が空の景色を見るよう勧めると、2人はそう言って、まるで指揮官の腕を枕にするようにして浅瀬に寝転がり、空を見上げ始めた。
しばらく3人で青空を見上げていると、指揮官の耳元に腰を下ろしたアイリが、何やら指揮官の頭の下に柔らかいものを差し込んできた。
当初、枕か何かだと思っていたそれは大きなアザラシだった。その

ふわふわなお腹で指揮官の頭を包み込むと、アザラシは可愛らしく『きゅ～』と鳴いた。
「指揮官様、いつもアイリたちと一緒に遊んでくれてありがとう」
そう言ってアイリは、その小さな手で指揮官の頭を優しく撫でた。
「いつも頑張ってえらいえらい……」
（……）
アイリの長い髪が、指揮官の頬を優しくくすぐった。
指揮官の顔を覗き込んでくる彼女の笑顔は、
真夏の太陽よりも眩しかった。

第３話へ続く……

第４話：ＢＢＱと誘惑の日焼け止め

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第４話：ＢＢＱと誘惑の日焼け止め

『水着を盗むタコ』の脅威を伝えるべく、依然として指揮官とキラスターは海水浴の参加者を探してビーチを進んでいた。

「ねーねー指揮官、あそこに誰かいるよ？」
（あれは……黛だね）
砂浜に立てられた大きなパラソルの下でくつろいでいるその人物を見て、指揮官の脳裏に一瞬「素通りしようか」という言葉がよぎった。
「あれ？　なんかテンション低くない？」
（いや、何でもない……）
キラスターの言葉にそう返しつつ、２人は黛の元へと向かった。水着姿の彼女は砂浜に敷かれた白いシートの上に座り、まるで眠っているかのように目を瞑っていた。だが指揮官の接近に気づくと急に目を開け……
「……」
指揮官を見てニッコリ……と、意味ありげな表情を浮かべるのだった。
（……）
そんな黛の笑みにヒヤリとしたものを感じつつも、例の『タコ』のことを伝えなければならない為、指揮官は渋々といった様子で黛の元に足を運んだ。
「指揮官、待ってたのよ～？」
指揮官がパラソルの下に入ると、そう言って黛は妖艶な笑みを浮かべ、見せつけるようにして足を組んだ。シミひとつない色白の肌、一

切の無駄がない引き締まった体つき、むちむちとした太腿、そして圧倒的な存在感を誇る巨大な双丘……
肌色面積の広い水着を着ていた為、否が応でもその大きさが強調されている。
キラスターは思わず、自身の胸と見比べた。
「ぐぬぬ……」
そして落胆した。
(黛……気分はどう?)
「最高よ〜。設備的には前に指揮官が貸切ってくれたビーチには劣るけど、広々としているから開放感があっていいわね！　もういっそのこと、上着どころか水着も脱いじゃいたい気分よ〜」
(いや、流石にそれはやめてね)
黛が水着の留め金に手をかけたのを見て、指揮官は思わず身構えた。
「ん、それってつまり……私の裸を他の人に見られたくないってこと？　もう、指揮官ったら欲張りさんなんだから〜」
(いや、というか基地の風紀的に……)
「うふっ……わざわざそんな堅い言葉を使って私を止めようとしなくても、私は貴方だけの黛さんですよ〜？　何ならいつでも見せてあげるし、言ってくれればいつでもイイコトしてあげるから……」
(あのね……)
「ふふっ……冗談よ〜」
冗談に聞こえないんだけど……
黛にからかわれていることに気づいた指揮官は、気を取り直すかのようにして小さく咳払いをした。
(そういえば臙脂は?)
「もー、せっかく人が積極的にアプローチしてあげてるのに、指揮官はすぐ他の女に目移りしちゃうんだからー！」
(他の女って……お姉さんでしょうに)
「ふふっ……冗談よ〜。姉さんなら、お昼ご飯の準備があるって少し前にここを離れたわ。もう少ししたら戻ってくると思うから……そ

れまで、私とイイコトしましょ？」
（あー……魅力的な提案だけど、その前に１つ報告しておきたいことがあって……本当は臙脂と一緒に聞いて欲しかったんだけど）
「んー？　愛の告白とか？」
（いや、そうじゃなくて……）
「なるほどね。つまり私たち姉妹を侍らせて～」
（違うから！）

黛のペースに流されてしまわないようにしつつ……指揮官はそこで、当初の予定通り『水着を盗むタコ』について黛に説明した。

「ふーん、それはエッチなタコさんね～」
指揮官の説明を聞くと、黛はさらに妖艶な笑みを浮かべて指揮官のことを見つめた。
（そういうわけだから、気をつけてね……）
「なるほどね。つまり、指揮官は私がタコに襲われて、すっぽんぽんにひん剥かれてしまうのを期待しているってことね？」
（期待してたら報告しないから……）
「それか、エッチなタコさんのエッチな触手で私が?????されるのを期待しているのね？　触手に全身を纏わり付かれ、ブヨブヨとした皮膚からは????粘液が滴り落ち、??の効果を持つそれを全身に塗りたくられ、感度３，０００倍、あられもない姿になった私の????を???と開き、タコさんは????し込んでくる。それだけではなく、全身の？という？全てに??が?????……」
（はい?????アウト！　ストップストップ!!!）
突然、黛の口から飛び出してきたアレなワードの数々に指揮官は慌てた。隣にいたキラスターも思わず顔を赤くしている。
（というか、水着を盗む以外で特に何かすることはないって言ってるんだけど……？）

「でも、タコさんについてはまだ何も分かっていないんでしょ？　だから、もしかしたらそういう事もあるかもしれないわね？」
（怖いからやめて……）
　指揮官はため息を吐き、黛との会話を切り上げることにした。話をするだけでも物凄い疲労感に苛まれたからだった。
（それじゃあ、臙脂にも伝えといてね）
「ああん、待ってよ～」
　そう言って臙脂の元を去ろうとした指揮官だったが、パラソルの下から出ようとしたところで黛に腕を掴まれ、止められた。
「折角だから、私とイイコトしましょ？」
　そのまま、黛は流れるような動きで指揮官の腕を抱き、その豊満な双丘の谷間に腕を挟み込んできた。
　気恥ずかしさから、指揮官は黛の拘束からやんわりと逃れようとするも……極東の諜報員という事もあり黛の力は想像以上で、まるで大蛇に絡みつかれているように身動きが取れなかった。
（いや、流石にそれは……）
「ふふっ……大丈夫。むっつりスケベな指揮官が考えているような事じゃないから～♪　まあ、君がそういう事をして欲しいんだった、何だってしてあげるんだけどね～」
（……それで、何したいの？）
　黛が満足してくれさえすれば解放してくれるだろう……そう思い、指揮官はせめて手早く終わらせようとそう聞いてみた。すると、黛は恥ずかしそうに顔を赤らめ、そして指揮官の耳元に唇を寄せ……
「……日焼け止め、塗り直して欲しいの」
（ああ、それくらいだったらまあ……）
　黛の囁きに、指揮官は軽く頷いてみせた。
「ふふっ、ありがと～」
　黛は小さく微笑むと、多種多様な化粧品が入ったバスケットの中から日焼け止めクリームのチューブを取り出すと、蓋を開けてその中身を自身の掌に落とし……
（ん……？　塗って欲しいんじゃないの？）

日焼け止めを塗って欲しいと言いつつ、なぜ自分の手につけたのだろうか？　……指揮官がそんな疑問を抱いていると……

「うん、その前に……ね」

黛はそこで、キラスターを手招きした。

「え？　あたし？」

「貴方、紫外線対策してる？」

「あー、うん。必要だって指揮官に言われたから、去年買ったものがまだ残ってたからちゃんと塗ったよ？　確か……サラダオイルってのを……」

（塗ったの!?　サラダ油を!?）

「サンオイルね？」

「そうそれ！」

（言い間違えにも程がある……）

「ふふっ……」

黛はキラスターに優しく微笑みかけた。

「でも、別に肌を焼きたいわけじゃないんでしょ？　使ってるオイルも安物みたいだし……あら、すっかり落ちちゃってるじゃないの……これじゃあ効果はないわよ」

「え、そうなの？」

「海に入った後に塗り直さなかったのね？　それにサンオイルだと、肌の老化の元になる紫外線を防げないから、折角の綺麗な肌が台無しになっちゃうわよ？」

「えぇー……それは困るなぁ……」

「そうよね！　だからこれ使ってみましょう」

そう言って黛は、掌につけた日焼け止めクリームを示した。言うまでもなく、キラスターに塗ってあげるつもりなのだろう。

「ＳＰＦ５０でＰＡ＋＋＋のこれならその心配は要らないわよ？　さらにウォータープルーフが付いているから、水遊びした後でも塗り直す必要はないし」

「へー！　なんだかよく分からないけど凄そうだねそれ！　塗って塗って～☆」

「ふふっ……それじゃあ、ここにうつ伏せになってね」
キラスターがシートの上にうつ伏せになると、黛は慣れた手つきで水着の紐を解き、彼女の白い背中を晒した。
「むー！　指揮官、変なとこ見ないでよね！」
（分かってる）
上半身だけ、しかも大切なところは隠れているとはいえ、指揮官の前で裸を晒すことに抵抗を感じるのか、キラスターは頬を膨らませて指揮官を流し見た。
なのでキラスターのプライバシーに配慮して、あまり彼女のことを見ないようにするべく、指揮官は黛が日焼け止めを塗り終わるまでの間、遠くの海の景色を眺めていようとしたのだが……

数十秒後……

「んんっ……ふぅ、はぁ……はぁ……んぅ！」
何故か、日焼け止めを塗って貰っている筈のキラスターから色っぽい声が漏れていた。
「ふふっ……気持ちいいかしら？」
「あ……そ、そこはらめぇ……ひゃん！」
「だめよ～、体の隅々までちゃんと塗らなくちゃ」
「で……でも、はぅん!?　や……やらぁ……」
（……）
どうしてこうなったのだろうか……
つい先ほどまで、黛から普通に日焼け止めを塗って貰っていた筈のキラスターだったが、いつのまにか喘ぎ声のようなものが聞こえてくるようになっていた。
一体、自分の背後で何が行われているのだろうか……？　キラスターのことが心配になってきた指揮官は、彼女の様子を確かめるべく背後へと振り返った。
「ふぁ……」

そこには酷く脱力し、息も絶え絶えとなったキラスターの姿があった。俄かに紅潮した肌、その瞳はハイライトを失い、口からはだらしなく涎が垂れ、時折その体がピクンと震えている。
元気なキラスターらしからぬ、そのあまりの乱れように指揮官が目を離せずにいると……指揮官の視線に気づいたのか、キラスターの背中に日焼け止めを塗っていた黛がウィンクしてみせた。
「ほら、貴方が変な声出しちゃうから、心配になった指揮官が見てるわよ？」
「だ……だめぇ……みないでぇ……」
「うふっ……それじゃあ、このまま指揮官に見られながら気持ちよくなってね～」
「や……やらぁ……きもちいの、もう……ッ」
「ん……これで、お・し・ま・い」
黛は小さく頷くと、キラスターのうなじをサッと撫で上げた。たったそれだけの動きにもかかわらず、キラスターはひときわ大きく体を震わせると、そのまま動かなくなってしまった。
（キ、キラスター……？）
指揮官はそこで、うつ伏せになっているキラスターの顔を覗き込んでみると……彼女はすうすうと息を漏らして眠っていた。
それも、とても心地良さそうな顔をして……
「ふふっ……気持ちよくて眠っちゃったみたい」
（……日焼け止め塗ってただけだよね？）
「当たり前じゃない～」
（いやいや、おかしいよね!?）
まさかさっきの日焼け止めクリームの中に何か入っていたのではないだろうか？　指揮官がそう思っていると、黛は指揮官の頭を見透かしているかのように不敵な笑みを浮かべた。
（何、今の……？）
「まあ、そんなことよりも……邪魔者はこうしていなくなったから、さっそく日焼け止めを塗り塗りして貰おうかしら～♪」
そう言って黛はキラスターの体をシートの端に転がすと、自分は

シート中央にうつ伏せになって水着の結び目を解き始めた。
一方、キラスターは派手に転がされたにもかかわらず一向に起きる様子がなく、むしろ丸出しになった自分の胸など御構い無しといった様子で爆睡していた。
仕方なく、指揮官はその辺にあったタオルをキラスターの体に被せてやり、それから黛の方へと視線を向けた。
（……）
「君、どうしたの～？」
（……その、相変わらず綺麗だなって）
シートの上に寝そべる黛の背中を見て、指揮官は率直な感想を述べた。水着の結び目を外したことで、上半身だけが生まれたままの姿になった黛の体は、間近で見ると芸術品のように美しかった。
シミひとつない白い肌、引き締まったお腹周りは誰がどう見ても理想のプロポーションであり、水着から少しだけはみ出した臀裂はセクシーなことこの上なく……
また、肩甲骨から腰にかけて伸びる胸椎の筋は普段あまり見ないこともあって、いやらしささえ感じてしまう程だった。
「そう？　ふふっ……ありがとう。貴方に褒められるとすっごく嬉しくなっちゃうわ」
目を細めて喜ぶ黛を見て、指揮官はバスケットの中に収められた多種多様な化粧品のことを思い出した。チラッと見た限りではあったものの、日焼け止めだけでも5種類以上はあったことから、黛の美容に対する真面目な努力が伺えた。
努力したからこそ得られた美しい体。そして、自分はそれに触れることが出来るのだ……そんな思いからくる劣情を理性で抑えつけながら、指揮官は黛の用意した日焼け止めクリームを手に取った。
（それじゃあ、始めるよ）
「ふふっ……優しくしてね」
まるでそういう関係であるかのように言葉を交わして、指揮官は黛の背中に日焼け止めを塗り始めた。
（……）

「ん……あんっ！」
（……）
「うん……はぁん……ぁぁん、上手……」
黛のスベスベの肌が、指揮官の手によって白く染められていく。優しくしてと頼まれたこともあり、指揮官は黛の繊細な肌を傷つけてしまわぬよう細心の注意を払って日焼け止めを塗ってあげているのだが……
それが逆に、女性の体を愛撫するような手つきとなってしまっていた。指揮官は普通にやっているつもりなのだが、程よい力加減と手捌きは黛を喜悦へと導き、彼女の口から艶やかな声を漏れさせた。
（黛……その、やりにくいんだけど）
「だってぇ、相変わらず君の手が気持ちいいからぁ……つい声がでちゃうのぉ……というか、去年と比べると格段に上達したみたいね？はぁぁ……とっても嬉しいわ」
心地よさのあまり黛の体が時折小さく震えた。
その振動はうつ伏せになったことで妖艶に潰れた双丘にまで伝わり、豊満なそれをいやらしく揺らせた。
（……）
その光景に思わず、指揮官は黛の背中に向けていた視線を彼女の下で潰れた双丘に向けてしまうのだが……
「ふふっ……君のいやらしい視線、感じるわぁ」
黛の呟きに、指揮官は慌てて視線を元に戻し……それから黛の胸に目が吸い込まれてしまわないよう注意しながら、彼女の背中に日焼け止めを塗り込む作業に集中するのだった。
（ん……こんなもんかな、お疲れさま）
「……んっ」
一通り日焼け止めを塗り終えて指揮官がそう告げると、黛は礼も言わずに起き上がり、そのまま指揮官に背を向けたままの状態でシートの上に落ちていた水着を拾い上げた。
そのまま水着を着直してくれるかと思いきや、黛は首に紐をかけただけで動きを止めた。このままでは、少し風が吹いただけでめくれ上

がり、大事な場所が丸見えになってしまう……
「黛さん、その気になっちゃった」
しかし、それにもかかわらず黛は指揮官へと振り返った。
そこで指揮官が目にしたのは……キラスターの時と同様、肌を俄かに紅潮させた黛の姿だった。
その瞳には恍惚とした色が灯り、セクシーに足を組み、そして外れかけた水着に零れ落ちそうなほど大きな巨峰を腕で抱える姿は、酷く官能的だった。
「ねえ指揮官……前も塗って欲しいなぁ」
（いや、それは自分でやって……）
「ふふっ……まあ、そう言わずに……今なら誰も見ていないし、君のために大きく育ったこの胸を好き放題触ってみたくない？　それとも、今更胸くらいじゃ満足できないかしら？」
（目的がすり替わってるけど……）
「気にしない気にしない♪」
黛はそう言って、胸を寄せて強調してみせた。
指揮官の目の前に、圧倒的な存在感を放つ魅惑的な双丘が迫る。そのあまりの光景に指揮官は目を釘付けにされ、最早逃げようという気にはなれなかった。
そしてキラスターは未だ起きる気配がなく、もはや両者を妨げる者など何もない……その事実に、指揮官の理性が吹っ飛びかけた。
……その時だった
（うわっ!?　冷た……！）
突然、どこからともなく指揮官の顔に水が飛んできた。当初、打ち上げられた波が風に吹かれ、飛んできたと思われのだが、どうやら違うようで……
「へへへ～、命中ぅ！」
（え？　この声は……）
海側から聞こえてきたその声に指揮官が視線を向けると、海中から1人の少女が飛び出してきた。
（少羽……）

「やっほ～、実力と美貌を兼ね備えた未来のミラージュクロス最有力候補……宏少羽だよ!!!」
（うん、知ってる）
砂浜に降り立ち、盛大な決めポーズと共に名乗りを上げた少女……宏少羽を見て、指揮官は苦笑いを浮かべた。
他の参加者たちと同様、水着姿の彼女は左手に網を持ち、右手に大きな水鉄砲を抱ていたことから、状況的に見ても指揮官の顔に水をぶっ放したのは彼女であることが分かる。
「指揮官、どう？　あたいの水鉄砲の威力は？　遠く離れた海からでも抜群の命中精度を誇る、あたい専用の水鉄砲！　ふふふ……びっくりした？」
（うん、お陰で助かったよ……ありがと）
「エ？　なんで感謝するの……」
思わぬ指揮官の反応に、宏少羽は疑問符を浮かべた。というのも、つい先ほどまで黛から誘惑を受けていた指揮官にしてみれば、頭が冷えて理性を取り戻せたからである。
「時間切れね……あーあ、残念」
黛は水着を着直し、つまらなさそうに拗ねてみせた。
（ところで少羽、左手に持ってるそれは何？）
「あー、これ？　ふっふっふ～、よくぞ聞いてくれた！」
宏少羽が左手に抱えていた網について指揮官が尋ねてみると、彼女は高らかに笑って網を広げ、その中身を披露した。
「これが今回の戦果よ！」
網の中には沢山の魚が収められていた。
それだけではなく、網の底にはサザエやハマグリなどといった貝類もいくつか見受けられた。
（おお……凄い、これ全部1人で？）
「当然の結果よ！　ここの魚たち、なぜか警戒心があんまりなかったから、手掴みでもこれだけ獲れたよ！」
（手掴みで!?　すごすぎ……）
なんでもないようにそう言ってみせる宏少羽に、指揮官は驚きを隠

せなかった。
「もうお昼時だし、早速食べるとしよう！　あ、沢山獲ってきたから、指揮官も食べていくといいよ！」
（食べるって、調理道具もないのに……？）
「勿論、そのまま食べるけど？　魚を生で食べる文化は日ノ丸にもあるし、お皿はそこら辺の葉っぱで代用できるし！　火を起こせば焼き魚にも出来るからね！」
（ワイルド……）
　どこからともなく太極剣（消毒済み）を取り出した宏少羽は、それを使って魚の下拵えを始めようとしたところで……
「あらあら～、それじゃあ美味しくならないですよ？」
　そこへ、1人の女性が姿を現した。
　長い黒髪、水着姿、黛に負けず劣らずグラマラスな体つき、艶やかな雰囲気を放つその人物は、何やら大きな鞄を抱えていた。
「あら、姉さん。遅かったわね」
「ふふっ、お待たせ～」
　それは黛の姉……臙脂だった。
　彼女はパラソルの近くまで来た臙脂は砂浜の上に鞄を下ろし、それから指揮官へ優しげな笑みを送った。
「ごきげんよう、指揮官様」
（ごきげんよう、臙脂。それは何？）
「これですか？　そろそろお昼時ということもありまして～、お店から持参した調理道具を用意していたんです。ＢＢＱの感覚で、たまにはお外で料理を作るのも宜しいかと思っていましたが……ちょうど良かったみたいですね～」
「ＢＢＱ！　いいね！」
　鞄を開け、臙脂がアウトドア用簡易調理キットと食材の入ったクーラーボックスを取り出したのを見て、宏少羽ははしゃぎ声をあげた。
（手伝うよ）
「いえいえ～。礼尚往来……施されたら施し返すのがこの世の常なので～、この場所にご招待してくれたお礼と言ってはなんですが、指揮

官様は料理が完成するまでの間、ゆっくりお待ちになっていて下さい♪」
「そういうことなら、私も手伝うわ」
砂浜に調理キットを展開した臙脂は、黛と共にすぐに持参した食材と獲れたての海の幸を使って料理を始めた。
酔客酒店を経営する彼女は料理上手と評判なだけあって臙脂の手際は良く、しかも姉妹の連携プレーもあって、いくつもの料理を同時並行で作り始めた。
「ねえねえ、あたいも何か手伝おうか？」
「それでは、少羽さんにはお肉を焼く作業をお願いできますか？　食材は全部クーラーボックスの中に入っていますので……全部使い切る勢いで焼いちゃって下さい」
「はいよ！　って……お肉これだけ？　うーん、これだけだとあたし1人で全部食べちゃうよ？」
（そういうことなら……）
クーラーボックスの中を覗き込み、肉が少ないことに不満を漏らす宏少羽を見て、ある事を思い出した指揮官は早速それを実行に移すことにした。
「指揮官、どうしたのよ？」
（いや、こんな事もあろうかと……持ってたから）
「持ってたって……まさかお肉を!?」
（うん、まあね。鹿肉でよければだけど……）
そう言って指揮官は、どこからともなく好感度アイテム『鹿肉』（オグララ用）を数塊だけ取り出し、宏少羽へと手渡した。
「え……し、指揮官……これ、一体どこから出したの？」
（指揮官だからね。鹿肉くらい常備しているさ）
「うーん、いくら指揮官だからって普通……そんなもの持ち歩かないと思うんだけど……というか、肉を常温保存って……大丈夫なのよ？」
怪訝そうな顔をしつつも、宏少羽は渡された鹿肉を焼き始めるが……次第に肉の焼ける良い香りが広がるようになると、つい先ほどま

で抱いていた疑問をなど、まるでなかったかのように目を輝かせるのだった。
「うーん……あれ……なんかいい匂い……」
（あ、起きた？）
役目を終えた指揮官が大人しくシートの上に座って料理が出来るのを待っていると、隣で眠っていたキラスターが目を覚ました。
「あれ？　あたし……いつの間に寝て……」
（あ、今起きると……タオルが……）
「……え？　きゃあああああ!?　な、なんで服つけてないのあたし……って何見てんのよ！　この変態指揮官ッ！」
（ぐは……!?）
勢いよく身を起こしたキラスターは、上に何もつけていないことに気がつくと、慌てた様子で胸を隠しつつ隣にいた指揮官を殴り倒した。
「本性現したわね！　いくらあたしのセクシーな体を見たいからって、まさか寝込みを襲うなんて……変態！　スケベ！　ロリコン！　甲斐性なし！　性欲魔！　うぇえーん……指揮官に見られたぁ！　もうお嫁に行けなーい……」
（ご、誤解だ……）
しこたま怒った挙句、盛大に泣き喚かれ……
殴られた痛みにも相まって、指揮官はどうする事もできなかった。
この後、キラスターは姉妹の作った絶品料理と宏少羽の作った鹿肉ステーキを味わい、なんとか機嫌を直してくれるのだった。
「んん……いい匂いだな」
キラスターに続き、出来た料理を指揮官も味わっていると……今度は鬱蒼と生い茂る森側から茂みを抜けて、そこへ新たな登場人物が現れた。
（オグララ？）
「あ、指揮官みっけ」
それは水着姿のオグララだった。
褐色の肌を持つＧ．Ｏ．Ｅ．傭兵社出身のケモミミ少女は指揮官

の存在に気がつくと、そこで盛大にお腹を鳴らした。
「指揮官、この匂い……鹿肉か？」
（あはは……匂いにつられて来ちゃったかな？）
「うん……私にも何か食べさせて」
（分かった。というわけで少羽、いいかな？）
「ふぉちろん！　いまふぁらたふさん焼くよ！」
　左手に料理の盛られた皿を持ち、口の中では焼けたばかりの鹿肉をもぐもぐさせつつ、宏少羽は指揮官から追加で渡された鹿肉を次から次へと焼き始めた。
「ララちゃーん、どこー？」
「ミア！　確かこっちの方に行ったと……って、なんかどっからともなく良い匂いがしてこないか？」
「くんくん……ほんとだぁ！」
　そんな会話と共に、さらにスリーローゼス（ローズトライスター）のミア、アリス、ルルが森の中から姿を現した。例によって全員水着姿である。
「お！　指揮官じゃん、ねえララちゃん見なかった？」
（オグララなら、そこにいるよ）
「あ、ほんとだぁ……ララちゃーん、美味しそうなの食べてますねぇ！　可愛いでしゅねぇ!!!」
　宏少羽の隣で、調理済みの鹿肉を幸せそうな表情で頬張っているオグララを見て、ミアもまた幸せそうな表情を浮かべるのだった。
「へぇ……砂浜でＢＢＱか、いいねぇ！」
「うーん……美味しそうな匂いを嗅いでたら、私もお腹すいてきちゃった～」
（じゃあアリスとルルも食べていってよ）
「いいのかい？　お邪魔しちゃっても……」
「でも……私たちまで参加したら、食材が足りなくなるんじゃない？」
（ん……多分、大丈夫だと思う）
　指揮官は確認の為に臙脂の方に目を向けると、
「大丈夫よ～♪」

出来た料理を素早く紙皿に盛り付けながら、彼女はそう言って余裕の笑みを浮かべた。
「こんな事もあろうかと、魚も沢山獲っておいたから安心するがいいよ！」
肉を焼きながら、宏少羽もガッツポーズをしてみせる。
「それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰おうかな」
「いただきまーす♪」
アリスとルルは黛から料理の入った紙皿を受け取り、２人は料理を作る姉妹と宏少羽に感謝を告げた後、料理に舌鼓を打ち始めた。
「食欲は満たされたけど、別の欲求はまだ満たされてないわねぇ……君もそうでしょ？」
指揮官に出来たばかりの料理を手渡しつつ、黛は去り際にそんなことを囁いてきた。
「あとで腹ごなしの運動なんてどう？　勿論、君と私の２人っきりで……なんて。ふふっ、楽しみにしててね～」
（……）
色っぽく、どこか挑発的な黛の視線を感じて、
指揮官は思わず頭をかいた。

第５話に続く……

第５話：続・真夏の幼女たち

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第５話：続・真夏の幼女たち

『水着を盗むタコ』の脅威を伝えるべく、依然として指揮官とキラスターは海水浴の参加者を探してビーチを進んでいた。
その後、日頃の重圧から解放され、海辺でのんびりとくつろいでいた帝国出身者たち（アナベル、アリシア、カロル、フィロ）と出会うも、特にこれといって特筆すべき点はないのでカット……
［代わりに帝国勢４人の活躍は、今後文字起こし予定の『縁日編』にてお見せする事になります。尚、『縁日編』の製作は１年後の夏を予定しております］
４人に事情を説明し、２人はビーチの奥へと進み続ける……

「ねえねえ指揮官、あそこに誰かいるよ？」
（あれは……ノア？）
キラスターの指差した方向に目を向けた指揮官は、そこで『ノア』の姿を見つけた。波打ち際に佇む彼女は、何やら水平線の先を見据え……吹き付ける風が、美しい青色の髪を静かに揺らしている。
「え？　ノアって……そんな人いたっけ？」
（そっか、キラスターは見てないんだっけ）
先程、グニエーヴルとの会話中に突然『ノア』が現れた際には、キラスターはドリスたちとの水遊びに夢中になっていたことを思い出し、指揮官は小さく頷いた。
（とにかく行ってみよう）
そうして、指揮官とキラスターは『ノア』に近寄った。
（おーい、ノア！）
「主様、先程ぶりでございますね」

指揮官たちの接近に気づいた『ノア』は2人の方に向き直ると、相変わらずの無表情で小さく頭を下げた。
「それで、そちらはヴィヴィアン様ですね」
「え？　あたしの名前、何で知ってるの？」
「はい。主様が送って下さった参加者名簿に記載されているお方の顔とお名前は、全て記憶しておりますので」
「へー！　あんなに沢山いる人たちの顔と名前、全部覚えてるんだ、すごーい！」
「どうも」
「えー、反応薄い！　褒められたんだからもっと喜びなよ！　あ、あたしのことはキラスターでいいよ。指揮官とかみんなそう呼んでるから」
彼女の『キラスター』というのはファミリーネームだったのだが、本名である『ヴィヴィアン』で呼ぶと、喫茶店バビロンに勤務する少女『ヴィヴィアン』と勘違いされがちだった。
なおかつ、彼女自身も『キラスター』と呼ばれることを好んでいるので、指揮官を含めたほぼ全員が彼女のことを『キラスター』と呼んでいた。
さらに言えば、グレートブリテン帝国にも『ヴィヴィアン（騎士団）』が存在していたりする。
「了解です。キラスター様」
そこで『ノア』は自分の胸に手を当てた。
「……私は『ノア』と申します。僭越ながら、この『島』の管理をさせてもらっている者です」
「管理人さんかー、なるほど！宜しくね☆」
キラスターは『ノア』の空いた手を取り、ぶんぶんと激しい握手をした。そのせいで『ノア』が身に付けているマントが揺れ、マントの下に隠れたその幼い体つきが露わになる。
「……お？」
「……？」
『ノア』の体を見たキラスターが、何かに気づいたように声を漏らし

た。
　その様子に『ノア』が首を傾げていると……
「ふっふっふっ……勝った！」
（……えっと、何が？）
「おっぱいの大きさ！」
（えぇ……）
　そう言って高らかに胸を張ってみせるキラスターに、指揮官は呆れたような表情を浮かべた。どちらにしろ、小さい事には変わりないのだが……
（キラスター……打ち解けた相手ならまだしも、初対面の相手に胸の大きさでマウントを取るのはちょっと……ノアに失礼だよ？）
「でもさー！　この島に来てる人たち、みんなおっぱいが大きい人たちばっかりなんだよね、そうなってくるとさぁ……セクシーでナイスバディーなこのあたしの魅力が薄まるっていうかー」
（『セクシーでナイスバディー（笑）』ね）
「笑うな！　っていうか指揮官こそ、さっきはあたしの小さい胸に欲情して、眠っている間にお触りしてきた癖に！」
（だから触ってないって……というか、小さいって自分で言うんだ……）
「うっさい！　変態！　スケベ！　ロリコン！」
（それ、自分で言ってて悲しくならない……？）
　もし指揮官が本当にキラスターのことを好色的な目で見ていたとして、キラスターが指揮官のことを『ロリコン』と言ってしまうということは、つまり……間接的に、キラスターは自身がロリであることを認めているようなものだった。
「主様、私にお任せ下さい」
（ノア？）
『ノア』は短くそう告げると、荒ぶるキラスターの前に立ち。
「キラスター様、落ち着いてください。古来より、よく言うではありませんか……『貧乳はステータスだ！　希少価値だ！』と」
「フォローになってないよ！」

逆効果だった。
しかし、それでも『ノア』は言葉を続ける……
「そうですか。ですが、胸の大きさといっても……所詮、女性の胸部についた脂肪の塊が大きいか否かによるものです。逆に体の動かしやすさ的な観点から言えば、キラスター様のようなツルペタの方が圧倒的に有利なのは明白でしょう」
「ツ……ツルペタ言うな！　っていうか、あんただって同じでしょうが！」
「と、このように貧乳には貧乳のメリットというものがございます。先ほどの名言もあるように、ただ大きいだけが優れているというわけではない筈です」
「それは、そうだけどさぁ……」
「確かに、外見的な特徴も大事ではありますが、最終的に重要なのは人の内面……その人が持つ本質にあると思われます。いくら大きく優れたものを持っていようと、それが内面や本質の良し悪しに繋がるとは限りません……ですので、胸の大きさで人を判断したりはしませんよね、主様？」
（……え？　ああ、そうだね）
突然話を振られ、少し驚きつつも指揮官がそう返すと……気のせいだろうか、指揮官は無表情だった『ノア』の表情に、僅かに安心した色が映り込むのを感じた。
「それでも、あたしはおっきいおっぱいが欲しいの！　いつかバルンバルンのボヨンボヨンになって、みんなを見返してやるんだから！」
キラスターは胸の周りに円を描くようにして両手を振り回し、胸をこれくらい大きくしたいことをアピールした。
「それではお聞きしますが、キラスター様はなぜ胸を大きくしたいとお考えなのですか？」
「え？」
『ノア』の問いかけに、キラスターは意外そうな顔になって……それから少しだけ考えるそぶりを見せた。
「そういえば、何でだろうね？　うーん……おっぱいが大きくなった

ら子どもっぽくなくなって、大人の女性として見られるようになるからとか？」
「ですがキラスター様はそもそも幼児体形なので、胸が大きくなった程度ではたかが知れてるかと……」
「幼児体形言うな！　あんただってそうでしょうが！」
「指揮官様はどう思われます？」
「無視すんな！」
（え……それ聞く？）
『ノア』に尋ねられ、少しだけ考えてみた後……指揮官は『女性の象徴』『母性』『包容力』という点でいくつか仮説を立ててみたものの、指揮官としての立場からその問いに答えることはセクハラになってしまうのではないかと、発言を思い留まる事にした。
「うーん……じゃあ、大きいと色っぽく見られるから、それだけでも沢山の人たちから注目されるから……とか？」
「それですと、キラスター様は不特定多数の人から好色的な目で見られたいという事になりますが、宜しいのですか？」
「あー……そうだねぇ、好きな人からそういう目で見られるのはいいけど……別に興味ない人相手だとねぇ……ウザいだけだし」
（あのさ……この話、もう終わりにしない？）
　このままでは埒があかないと、指揮官は2人の議論に割って入るようにしてそう告げた。
「そうだねぇ、このまま話しても虚しいだけだし」
「そうですね。では、最後に一つだけ宜しいでしょうか」
　そう言って『ノア』は小さく手を上げた。
　2人が頷くと、そこで彼女は小さく息を吐き……
「一つ付け加えますと……私のバストサイズはキラスター様よりも上だと存じます」
「はあ？」
　急に、どんぐりの背比べが始まった。
　キラスターは青筋を浮かべて『ノア』を見つめた。
「いやいやいや！　パッと見た感じてもあたしの方が大きいって！

ほら、真っ平らなそっちとは違って、あたしはそれなりに膨らみがあるから……」
「キラスター様は『着痩せ』というものをご存知ですか？　服を着ると、案外痩せて見えることを意味しています」
「そ、それは……って、それくらい知ってるよ！　っていうか、そんな薄布一枚で着痩せするっていえるほどおっぱいないでしょ！」
　キラスターは『ノア』が着ていたスポーツブラを指差すも、『ノア』はそれほど気にしていない様子だった。
「キラスター様。先ほど申しました通り、胸の大きさで人の本質が決まるというものではありません。なので、私より小さいからといって、そこまで悔しがる必要はありませんよ？」
「なんで大きさで勝ってる前提で話を進めるかなぁ!?　っていうか、そっちこそ小さいから悔しがってるんでしょ！」
「そうですか。では、第三者による公平なジャッジによりどちらが大きいのかを確認しましょう」
「そうだよね！　そっちの方が早いもん！」
　そう言って『ノア』とキラスターは同時に指揮官の方へ目を向けた。2人の視線に指揮官が戸惑っていると……
「指揮官！　さっき寝てる時に、セクシーギャルなあたしのおっぱい見たんでしょ!?　だったら、その大きさもちゃんと分かってるよね！」
（あのね……）
　つまり、キラスターは事故とはいえ胸を見せてしまったことを許す代わりに、何が何でも自分に票を入れろと言いたいのだろう。
　その提案に、指揮官が脱力するものを感じていると……
「そういうことでしたら……」
（ちょ……!?　待って何してるの!?）
　着ていたスポーツブラの裾に手をかけた『ノア』を見て、指揮官は慌ててそれを制止した。
「しかし、正当なジャッジをする為にはキラスター様と条件を同じにする必要があります。なので、審判である主様には、実際に私の胸を

見てもらって……」
（しなくていいから！　この話終わり！）
　白熱した議論を無理やり終わらせ、キラスターが納得いかないというような顔をしていたものの、それを無視して指揮官は『ノア』に別の話題を振る事にした。
（ちょっと聞きたいことがあるんだけど……）
「何でしょう？」
（『ノアちゃんレーダー』って、人間以外の生き物を探すことって出来たりする？）
「対象の大きさにもよりますが、可能です。一つ付け加えると、地中の微生物などといったものを検索することは不可能ですが……」
（そっか、なら……）

　指揮官は『ノア』に、
　①『水着を盗むタコ』が出現し、②高橋龍馬の水着が盗まれ、③他にも被害が出たこと、そして自分たちはタコに関して、④参加者全員に注意喚起して回っているところである……ことを説明した。

「なるほど。タコですか……」
（そういうわけだから、タコを探して欲しいんだけど……）
　いちいち参加者たちに説明して回るよりも、騒動の元凶であるタコを捕まえるなり何なりした方が早いと思い至った指揮官は、『ノア』のレーダーを使ってタコを探そうと考えた。
「承知しました。少々お待ち下さい……」
『ノア』はそう言って頷くと、そっと目を閉じてシェロンやグニエーヴルに披露した時と同様、自身の周囲に光のアンテナを展開し……
「ぴこーん、ぴこーん、ぴこーん……」
　例によって、レーダーっぽい擬音を口にした。

「え？　なになに！　なんかおもしろーい！」
その様子を、キラスターは興奮した様子で見つめた。
やがて『ノア』はレーダーっぽい音を口ずさむのをやめると、頭上のアンテナを消滅させ、それから小さく息を吐いた。
「分かりました」
（それで、タコはどこに？）
ゆっくりと目を開けた『ノア』は指揮官の方へと向き直り……そして、こう続けた。
「先ほど、グニエーヴル様が年少組の方々を遊ばせていた場所の近くに潜伏している模様です」
（え……？）
『ノア』の発したその言葉に、指揮官はとてつもなく嫌な予感を覚えた。それと同時に、ある1つの可能性が生まれる。
「どしたの、指揮官？」
（これはまだ憶測の域を出ないんだけど……）
そう言って、指揮官はタコが襲う人物の傾向について自分の考えを口にした。
タコに襲われたのは最初に高橋龍馬、続いてシャロ、そしてアルト……一見すると男女問わず無差別に襲って水着を盗もうとしているのだと思われがちなのだが、実は襲われる人物の傾向について1つだけ共通することがあった。
それは『年齢の若さ』だった。
学生の高橋龍馬は勿論のこと、シャロはまだ少女と呼べる年齢であり、そしてお酒を嗜みはするものの、年齢的に言えばアルトもまた若かった。
そして先ほどの『ノア』による探知で、タコがグニエーヴルの近くに潜伏していることが明らかとなり……付け加えると、彼女は今、年少組のドリスとアイリの面倒を見ている真っ最中だった。
それが意味することはつまり……
（2人が危ない！）
「え、ちょ……待ってよ！」

最悪の事態を想定し、指揮官はすぐさま元来た道をダッシュで引き返し始めた。キラスターもそれに続き、波打ち際に『ノア』がただ1人残される形となる。
「一つ付け加えると、あのタコは……」
『ノア』は走り去る2人の背中に向かって何かを伝えようとするも、距離的に声が伝わらないことを知ると、仕方なく押し黙ることにした。
「まあ、特に問題はないかと……」
そうして、彼女は再び海の方へ目を向けるのだった。

ーーーーーー

一方その頃……
グニエーヴルによって見守られる中、ドリスはウサギ型ペットのフィービーとアザラシ型ペット数種を相手に熾烈な鬼ごっこを繰り広げていた。
「あははは！　にげろにげろー！」
ドリスは水鉄砲を上空に向けて威嚇射撃しながら、広い砂浜を走ってペットたちを追い回している。
「あはははーーー最初に捕まった子は、ドリスちゃんが次にする実験の、実験台になってもらうからね！　だから、頑張って逃げろーーー!!!」
ペットたちは、ドリスのやる怪しげな実験に付き合いたくないが為に、必死になって砂浜を逃げ回る。中にはドリスから逃れる為に遠くの方まで行こうとするものもおり、そんなペットたちを追ってドリスの姿はどんどん遠ざかってしまう……
「ドリスさん、あまり遠くにいかないで下さい」
グニエーヴルはそう声をかけるも、ドリスはそれに気づいた様子はない。仕方なく、グニエーヴルは自分の持ち場を離れてドリスの行方を追った。
「〜♪」
砂浜にアイリが1人で残される形となる。

その傍らにはペットのモモがいたものの、1人と1匹は砂のお城を作ることに夢中で、グニエーヴルがその場から離れたことに気づくことはなかった。
『……』
そんな彼女を遠くからじっと見つめる影があった。
海面から顔を出したそれは、砂浜の中にアイリが1人であることを確認すると静かに上陸し、8本の触手を器用に動かして音もなくアイリの元へ忍び寄り……
「あれ、グニエーヴルお姉ちゃん？」
アイリはそこでようやくグニエーヴルとドリスががいなくなっていることに気づき、顔を上げて周囲を見回し、2人の姿を探した。
その最中、身を隠そうと咄嗟に浮き輪の中に隠れていたそれと目を見合わせ……
「え……た、タコさん？」
『……』
バレちゃしょうがない……そう言わんばかりの仕草でタコは浮き輪の中から顔を出すと、その小さな両目を光らせてアイリを見据えた。
「え……え……？」
アイリは戸惑いつつも、タコの発する奇妙な気配を感じて後ろに下がるが、それよりも早くタコは怪しげに8本の触手をくねらせ、じりじりと距離を詰め始めた。
突然の出来事に、ペットのモモはどうしていいか分からず混乱しているようだった。
「た、タコさん……なの？」
『……』
「えっと……アイリに何か用なの？」
『……うじゅり』
「……っ！」
法則性もなく柔軟に動く触手に恐怖を感じたアイリは、慌ててモモを抱きかかえて逃げようとするが……足がすくんでしまったのか、そ

の場から動くことができなかった。
『……』
その間も、タコは粘膜の張った触手を揺らめかせ、アイリめがけて接近する。
「い……いや……こ、来ないで……！」
涙目になりながらも、アイリはタコから逃れようと踏ん張るが、どうしても足腰に力が入らず、尻もちをついた状態で後ろに下がることしか出来なかった。
やがてタコとの距離がすぐ目の前にまで迫り……
「……っ！嫌、助けて、グニエーヴルお姉ちゃん……！　ドリスちゃん……！」
今更ながら助けを呼ぶが、大人の女性は周りにおらず、頼れる親友の姿もない。モモはＢＭ操縦のアシストがメインのペットであり、さらに言えば海水浴の為に護身用のオプションを外してしまっていたことから、この状況への対処は不可能だった。
「やだ！　来ないで……！　来ないで……っ！」
アイリは必死にタコへ訴えかけるも、タコは聞く耳を持たない様子で、その不気味な目を怪しく光らせた。
「助けて……！お母様！　指揮官様……っ!!!」
アイリは最も信頼する２人の名前を呼ぶが……
育ての親であるハインリヒは多忙な為『島』に来られず、そして指揮官は何やら忙しそうに『島』を歩いて回っている。
どちらとも助けに来られない身であることは、アイリ自身もしっかり理解してはいた。しかし、どうしても助けを求めずにはいられなかった……
『……うじゅる』
次の瞬間、タコは８本の触手を使って勢いよく砂を蹴ると、空中で触手を大きく広げ、そのままアイリの小さな身体めがけて飛びかかった。

「いやあああああああああぁぁぁぁぁぁ!!!」

アイリは悲鳴をあげ、目をギュッと瞑った。
やがてタコの触手がアイリの身体に触れ……

（アイリ!!!）

「……えっ!?」
聞き馴染みのあるその声を耳にしたアイリは、思わず目を見開いた。すると、自分めがけて飛びかかったタコとの間に割って入るようにして、その人物がアイリの盾にとなってタコの前に立ちはだかった。
（ぐあああああッッッ!?）
「し、指揮官様!?」
その姿を見たアイリは驚愕し、思わず名を口にした。
それは指揮官だった。
ギリギリのところでアイリがいる砂浜にたどり着いた指揮官は、タコが飛びかかったタイミングでブーストを発動し、アイリの前に躍り出ると……そのまま、自らの身体でタコの触手を受け止めた。
（き、気持ち悪ッッッ……!?）
タコの触手に纏わり付かれ、指揮官は思わず悲鳴をあげた。ぶよぶよの肉感に粘膜のドロドロとした感触、そして冷たい吸盤が張り付き、あまりの悪寒に鳥肌が立ってしまう程の気持ち悪さを感じた。
（アイリッッッ!!!　逃げろ!!!）
それでも、指揮官はタコを掴んで引き剥がそうとはせず、纏わり付かれた状態のまま背後のアイリに向かってそう叫んだ。
「指揮官様……っ!?　で、でも……!」
（いいから早く……ッ!　今の内に……ぐっ!?）
タコの触手が水着の中に入って来ようとすると感覚に、指揮官は打

ち震えた。しかし、それでも指揮官はタコを引き剥がそうとはしない……

なぜなら、ここで無理に引き剥がしてしまえば、タコが再びアイリを襲いかねないからだった。そしてブーストも使い切ってしまった以上、陸上を素早く動き回るタコの素早さについて来られるか分からなかった。

（急いで、長くは持たな……え？）

『……』

指揮官がアイリに向かって呼びかけていた、その時だった。急にタコは指揮官の体から飛び退くと、何やら不満そうな顔をして指揮官を見つめ……それから砂浜を歩き、海の方へと戻っていった。

やがてタコの姿が海中に消えた。

指揮官は呆然とそれを見送った後、後ろを振り返ってアイリの無事を確認すると、ホッと胸を撫で下ろした。

「指揮官ー！　大丈夫ー？」

（ああ、3人とも……うん。どうにかなったよ）

遠くから慌てた様子で走ってくるキラスター、ドリス、グニエーヴル、そしてペットたちの姿を見つけ、指揮官は彼女たちに向かって手を振り、無事であることをアピールした。

「で、タコは？」

（ごめん、逃げられた）

大きなパンダちゃんハンマーを手にして周囲を見回すキラスターに、指揮官は手をついて謝った。

「あの、指揮官様。一体何が……」

（ああ、実は……）

説明を求めるグニエーヴルに対し、指揮官は例の『水着を盗むタコ』がこの場所に現れ、アイリに襲いかかろうとしていたことを説明した。

「申し訳ありません、私がついていながら……」

（いいよ。でも、どうやらタコもアイリが1人になるタイミングを見計らっていたみたいだし……相当賢い個体だと思うから注意してね）
「はい、肝に命じます」
　その言葉にグニエーヴルは強く頷くと、それからタコの攻撃を受けた身を案じるかのように、指揮官の体を頭のてっぺんからつま先まで凝視した。
「指揮官様……お怪我は？」
（大丈夫。タコに纏わり付かれたところがまだちょっと気持ち悪さが残ってるけど、それくらい。それよりもアイリの方を見てあげて）
「了解です」
　アイリは特に何の外傷もなく、放心状態で砂浜にへたり込んでいた。しかし、万が一の場合に備えて指揮官はグニエーヴルへ指示を送った後、その場で深々とため息を吐いた。
「指揮官、お疲れ様☆」
（うん、ありがと）
　ウィンクと共に指をVの字にした敬礼をしてみせるキラスターに、指揮官は小さく頷いた。
「タコ逃しちゃったねー……うーん惜しい！」
（でも収穫はあったよ。やっぱりあのタコは、男女問わず若い子の水着を盗もうとする傾向にあるんじゃないかと思う。現に、こうして自分が盾になった時は何も奪らずに離れていったし……）
「ふーん。なるほどねぇ……っていうか、そういえば指揮官って何歳だっけ？」
（うーん、それは聞かない方がいいかな）
「そう？　まあいいや」
（それはいいとして……だから今後はそれを踏まえた上で、しっかりと防衛体制を構築していく必要があるなと思って……）
　指揮官がそう言いかけた時だった。
「指揮官様、アイリさんが……」
　アイリのことを見ていたはずのグニエーヴルが、ふと何かに気づいたように声を発した。

（どうしたの!?）
まさかまたタコが現れたのだろうか……？
そう思った指揮官は素早くアイリの方へ目を向けるも、その場にタコの姿はない。代わりに酷く項垂れた様子のアイリと、それを心配そうな眼差しで見つめるドリスとグニエーヴルの姿があった。
（アイリ……？）
「うぅ……うわぁぁぁぁん」
（……っ！）
次の瞬間、顔を上げたアイリの両目から大粒の涙が溢れ落ちた。これには、彼女の腕の中でギュッと抱きしめられているモモも驚いた表情を浮かべている。
「あー、長官が泣かした！」
（え?!　そうなの……!?）
ドリスの言葉に指揮官は思わずギクリとなった。
そしてふと、自分の行動を思い返してみると……確かに、タコからアイリのことを守るためとはいえ、つい強い口調が出ていた。そのせいで彼女のことを驚かせてしまったのかもしれないと、指揮官は彼女に謝ることにした。
「うぅ……違うの、指揮官のせいじゃないの」
しかし、指揮官の謝罪に対してアイリは涙を流しながらも首を横に振った。
（え……じゃあ）
「アイリ……こわかったの」
（怖い？　さっきのタコが……？）
「うん、タコさんもこわかった。でも、それよりもっとこわかったのは……指揮官様がおそわれて、くるしそうにしてたこと」
（……）
「アイリ、指揮官様がいなくなるんじゃないかって思った……でもアイリ、何もできなかった。こわくて、うごけなくて……指揮官様がおそわれてるのをただ見てるだけしか……」
（……）

「もう、いやなの……アイリの目の前からたいせつなひとがいなくなるのは……！　指揮官様、アイリの前からいなくならないで！」
（……っ）
悲痛な叫びを上げる少女のことを
指揮官は思わずギュッと抱きしめた。
育ての母親であるハインリヒに拾われる以前の記憶を全て失っているアイリは、今回の一件で失われた過去の記憶をうっすらと思い出してしまったのだろう。
（大丈夫。ここにいるよ）
指揮官はアイリ耳元にそう囁きかけると共に、怯える長い髪を優しく撫で、細かく震える背中をさすってあげると、やがて小さな彼女は安心を得たようだった。
（落ち着いた？）
「……うん。指揮官様、ありがとう」
（ごめんね。来るのが遅くなって……）
「ううん、指揮官様はなにもわるくないよ。だからあやまらないで」
アイリの小さな手が指揮官の手に触れた。
「指揮官様」
そう言って、アイリは真っ直ぐに指揮官を見据え……
「……アイリ、もっと強くなるね」
そうして、強い決意を秘めた言葉を口にした。
「指揮官様にまもられてばっかりじゃなくて、いつか指揮官様のことをまもってあげられるくらい強くなるから……だから私のことを、アイリのことを……すてないで」
（……っ）
アイリの言葉に、指揮官は思わず自分の体に力が入るのを感じた。
「指揮官様……？　どうしたの？」
（大丈夫。何でもないよ）
「でも、辛そうな顔してるよ」
（ん……ちょっと、走り過ぎて疲れたのかも）
「そっか、じゃあ……よしよし……」

アイリは指揮官の胸の中に身を預けると、まるで子どもをあやすかのように指揮官の体を優しく撫で始めた。
「……指揮官様。いつもアイリのことを守ってくれて、ありがとう」
つい先ほどまで自分が大変な目に遭っていたにもかかわらず、こうして他人を気遣い、親身になって寄り添ってくれている。
その姿は、まだ十代にも満たない少女にしては珍しく、どこか大人びた雰囲気すら感じられる程だった。
しかし、指揮官は彼女の境遇を知っていた。
親を失い、日常を失い、居場所を失い、そして自分の記憶すらも失ったみなしご……その小さな体に、既に人が味わう一生分の悲しみを背負いながら生きているのだということを。
過去は変えられない、しかし未来は変えられる。
ならばこそ、彼女にしてあげられることは……
（……）
守ってあげよう
彼女の平穏と、未来を……
アイリの安らかな表情を見つめ、指揮官は心の中で固くそう誓うのだった。

第6話へ続く……

第６話：岩場でスロぴょい

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第６話：岩場でスロぴょい

タコの襲撃から、指揮官が身を呈してアイリを守り抜き、それから数分後……
機械教廷組によって占拠された海岸の一角
そこではスロカイを始めとする９名の機械教廷出身者たちが、羽を伸ばして自由気ままにくつろいでいた。

「海水浴と聞いて、どのような下らないところへ連れて行かれるかと思いきや、まさかこの地球上にまだこれ程の場所が残っていたとはな。この静謐さ、まさに外部から隔絶されたかのよう……フッ、たまには凡人も良いことをする」
砂浜に立てかけられたパラソルの下で、水着姿のスロカイは美しい海を前に微笑を浮かべた。その隣には、当然のようにマティルダの姿もある。
「そうですね。ところで陛下、ここは日差しが強いみたいなので、この日焼け止めクリームをお使い下さい。それで……も、もし宜しければ、私が陛下の体にお塗りして差し上げ……」
「いや、日焼け止めはしてある」
「そ、そうですか……」
マティルダは静かに落胆した。
「フッ……だが、そうだな」
突然、スロカイはマティルダの手から日焼け止めのチューブを奪い取ると、蓋を開け、クリームを自分の掌に落とした。
「へ、陛下……？」
「余が直々にお前の体に塗ってやろう」
「え……そ、そんな！　私なんかのことで、陛下の手を煩わせるなど勿体無ないです！　それくらい自分で……」

「マティ、いちいちそんなことを気にする必要はないぞ？　それに、お前の体にこの白濁を塗りこむのは……余がしたいからそうするのだ」
「へ……陛下……あんっ！」
「ほう？　少し触れられただけでいい反応ではないか」
「こ、これはただ……日焼け止めが思いのほか冷たくて」
「そうか。なら続けるぞ？」
「お……お待ち下さい陛下！　ひゃ!?　あ……そ、そこはダメです！　そこだけは……あああああああッッッ!!!!」
砂浜にマティルダの嬌声が響き渡った。

「……」
２人から少し離れた場所では、いつものチェーンソー……ではなく、木の棒を持ったウェスパが１人で黙々とスイカ割りをしていた。
スイカはどうやら七瀬汐月が作ったものらしく、剛腕を持つウェスパですら一撃では叩き割れないほどの強度を誇っていた。
「……♪」
それでも、砂浜にはすでに無数のスイカの残骸が転がっており、数回の殴打でまたしてもスイカを粉砕したウェスパは、無表情ながらもどこかスッキリとした顔つきとなっていた。
［粉砕されたスイカは後ほど、スタッフたちで美味しくいただきました］

「あー……陽の光は嫌いだけど、たまにはこういうのもいいよね～」
「そうですわね。こうして普段は聞くことのない自然の音色に耳を澄ませながら読書を楽しむというのも、また一興というものです」
骸の人格が表面化し、大人っぽい姿となったヴィノーラは木陰に座ってほんわかとした表情を浮かべ、その隣ではジュディスが涼しげに読書をしていた。
「青い海、白い砂浜、そして……かき氷～♪」
「はあ……全く、貴方はいつもそれですか」
また、ヴィノーラたちのすぐ近くでは、リルルとシンシアが同じパ

ラソルの下で夏の海の風物詩を堪能していた。

「アイリス、あれは何だろうか？」
「え……どこ？」
　ウィオラとアイリスは波打ち際で海水に浸かり、水の冷たさを満喫していると、何やら赤いボールのようなものが海面に浮かんでいるのを見つけた。
「ボールか何かに見えるが……」
「そういえばさっき、基地の子供たちがビーチバレーをしようって言ってたけど、もしかしたらそのボールかもしれないわね」
「だが、なぜこんなところに？」
「きっと海の方にボールを飛ばしちゃって、ここまで流されてしまったのよ。このまま沖の方に流されちゃったらお魚さんたちが餌と間違えて食べちゃうかもだから、私たちで確保しておかなくちゃね」
　海に流されたビニール袋を、ウミガメがクラゲと勘違いして食し、それが元で死んでしまった……という事例があるのを知っていたアイリスは、そうならないようボールを回収することを決めた。
　アイリスは海中を歩いて進んだ。
　幸いにも、ボールが漂っているのは浅瀬でもあった為、アイリスは特に何事もなく海を進むことができた。
「アイリス、気をつけるのだぞ」
「分かってる。もう少しで……」
　アイリスの指先がボールに触れた時だった。
「え？」
　その瞬間、ボールが振り返った。
　いや、それはボールではない……タコだった。
『……うじゅり♪』
　そんな鳴き声と共に、タコはアイリスが反応するよりも早く彼女に向かって触手を伸ばし、着ていた黒色の水着へと絡みついた。
「え……え……？」

突然のことにアイリスは戸惑いを隠せなかった。
「どうした、アイリス？」
「えっと……これ、ボールじゃなかった」
タコは吸盤を使ってアイリスのお腹に張り付き、水着の隙間に触手を入れようとしている。アイリスは何が何だか訳も分からず、ウィオラへと振り返った。
「それは……タコか？　動物界、軟体動物門、頭足網、鞘形亜網、八腕形上目、タコ目の……」
「そうみたい、だけど……」
アイリスは冷静にタコを見下ろした。
タコは触手を器用に動かして水着の結び目を解き、それと同時に水着の内側に滑り込ませた触手を引っ張り始めた。
「えっと……どうすればいいの？　これ」
「いや、私に聞かれても……」
そんな言葉を交わし、ウィオラは少しだけアイリスの水着に絡みついたタコを見ていると……
「もしや、そのタコはアイリスの水着を欲っしているのではないか？」
「え？　そうなの？」
『……（こくこく）』
やがてタコの意図に気づいたウィオラがそう聞いてみると、タコはまるで人の言葉が分かっているかのように頷いてみせた。
「えっと……あの、タコさん。これは食べ物じゃないのよ？　食べたらお腹痛くしちゃって、下手したら死んじゃうし……だから離してくれると嬉しいんだけど……」
『……うじゅる！』
アイリスは水着を離すよう説得してみるも、しかしタコはどうしても水着が欲しいのか、引っ張るのをやめようとはしなかった。
「そう……そんなに私の水着が欲しいのね。でも……ごめん、これはあげられないの……」
アイリスはそう告げ、目を閉じた。
すると、彼女の体から水着が消失した。

『……うじゅ!?』
　そのため、水着を引っ張っていたタコは勢い余って海面に落下してしまった。目の前から急に水着が消えてしまったことに、驚きを隠せないようだった。
「私は少し念じるだけで、一瞬で着替えることができるの。凄いでしょ？」
『……！』
「ごめんね。これは私の体の一部みたいなものだから……でも、そんなに水着が欲しいんだったら指揮官に相談してみて！　あの人ならきっとタコさんにも似合う水着を用意してくれると思うよ？」
『うじゅ！』
　タコはアイリスに興味を失ったようで、海中に身を引っ込めると、そのままどこかへと泳いで行ってしまった。
「何だったの……？」
「さあ？」
　タコを見送り、波打ち際に戻った時だった。
（おーい、２人ともー！）
　そこへ指揮官とキラスターが駆けつけてきた。
「うん？　ああ、指揮官ね」
（って、アイリス……！　なんて格好して……）
「え？」
　アイリスの姿を見て、指揮官は慌てて目を逸らした。
　タコの触手から逃れるために体から水着を消したアイリスは何も身につけておらず、そのため大切なところが丸見えな状態になっていた。
　長い金髪、じっとりと湿った白い肌、精巧な作りの義体を使用していることもあって、一糸纏わぬ姿で波打ち際に佇むアイリスの姿は、まるで神話に登場する女神のように美しかった。
「あ、これね？　実は……」
（あのさ、アイリス……いくら近くに女の子しかいないって言っても、島には男性もいるんだし、大胆過ぎだから……）

「ち、違う！　違うの！　説明させて……！」

アイリスは水着を出現させ
そして指揮官に一連の出来事を説明した。

（そっか、タコがここに……）
「うん。ついさっきまでここにいたんだけどね」
指揮官はアイリスの視線を辿って海側に目を向けるも、そこには既に何の気配もなかった。
「ねえ、さっきのタコは一体なんなの？」
（その話はまた後で……それよりも、２人はタコがどこに向かったか覚えてる？）
「んーと、確かあっちの方に行ったような」
「待て、この先には陛下たちがいるぞ」
アイリスの言葉に、ウィオラがそう付け足した。
その時だった……

ーーーーー

『うじゅ……』
ややあって海面に浮かび上がったタコは、次の獲物を探すべく、その場所からビーチを眺めていると……
『うじゅり……♪』
やがて砂浜に立てられたパラソルの下にピンク髪の少女の姿を見つけると、素早く潜行し目標への接近を開始した……

ーーーーー

「ふぅ……相変わらず、マティは感じやすいな」
ひとしきり恋人を愛でた後、スロカイはパラソルの下で満足げな吐息を漏らした。
その傍らには、幸せそうな表情で眠るマティルダの姿があった。だが、今の彼女はだらしなく水着を大きく着崩したあられもない姿になっており……指揮官が見たら絶対に慌てる光景だった。
「ふぇへへへへ……へいかぁ……♡」
「寝言まで漏らすとは……フッ、愛い奴め」
そんなマティルダの体に毛布をかけ、スロカイは足を組んで背伸びをしてみせた。
「だが、物足りんな。1人だけ気持ちよくなりおって……教廷の外という普段とは違う環境でしたからか、いつも以上に敏感になっていたのかもしれないな」
マティルダへ恨めしそうな目を向けるも、彼女が起きる様子はない。仕方なく、スロカイはマティルダが起きるまで自分も眠っていようと目を閉じた。
『うじゅり……』
そこへ、海中から砂浜へと上陸したタコがゆっくりと忍び寄ってきた。
タコはパラソルの下で眠る2人の周りに誰もいないことを確認すると、静かにパラソルへと近寄った。
ちなみに、ウェスパは気持ち良さそうにしている2人に気を利かせて、いつのまにか大量のスイカと共に姿を消していた。
スロカイに対する脅威がすぐ間近にまで迫っているにもかかわらず、彼女の守り刀であるマティルダは未だに目を覚まそうとしない。
『うじゅるじゅる～♪』
やがてタコはスロカイの足元にまで来ると、そのベタベタとした粘膜で覆われた触手をスロカイの足に伸ばし……
『……うじゅ？』
しかし、タコの触手がスロカイに触れることはなかった。それもそ

のはず、スロカイの水着を盗ろうとするタコの皮膚を、後ろから何者かが引っ張ったからだ……

『うじゅ!?』

思わず視線を背後に向けたタコは、そこでスロカイの護身用ペットであるダークラビットと目を見合わせて、酷く驚いたように飛び上がった。

『……』

ヌルヌルしたタコの皮膚をがっしりと掴んだダークラビットは、口を大きく開けて鋭い歯を見せびらかし「何しとんじゃワレ!?」と目を怪しく光らせ威嚇していた。

「ほう、そのような汚らわしいモノで余を好き勝手出来ると思ったか？　本気で？」

いつのまにか身を起こしていたスロカイが、恐怖で震えるタコに向かって恐ろしい形相でそう告げた。

『う、うじゅ……』

「失せろ」

ーーーーー

『うじゅーーーーーーーーーーーーー!!!!??』

（え？　何!?）

「指揮官、見て！　タコが！」

指揮官がキラスターに示された方向に目を向けると、そこには吹き飛ばされ、空中を華麗に舞うタコの姿があった。

謎の力により空中に舞い上がったタコはそのまま上昇を続け……そして、ついに見えなくなってしまった。

「あれって……さっきのタコさん？」

「そのようだが……一体何が……」

アイリスとウィオラは思わず顔を見合わせた。
とりあえず４人は当初の予定通りスロカイの無事を確認するべくその場所へ向かうと……そこには、パラソルの下で何やら青筋を浮かべているスロカイと、ボキボキと指を鳴らす仕草をしているダークラビットの姿があった。
（スロカイ様！）
「ん……ああ、誰かと思えば凡人ではないか」
（はい……それで、タコは）
「来るのが遅いぞ。全く、何なのだあのタコは！　余に不貞を働こうとするものだから、ダークラビットの力で空の彼方まで吹き飛ばしてやったぞ」
（そ、そうですか……ご無事でなによりです）
とりあえずスロカイの無事を確認したところで、指揮官はホッと胸を撫で下ろした。すぐ近くで眠っているマティルダの蕩けた表情が気になりはしたものの……
「凡人、何か知っているようだな？」
（はい。実は……）

指揮官はスロカイ、アイリス、ウィオラに事情を説明した。するとタコが吹き飛ばされた際に生じた爆発音が気になったのか、アルトやグルミ、トリスタに黛と……今まで会ってきた仲間たちが続々とその場に集まってきた。
因みに水着をタコに盗られてしまった高橋龍馬は、その後、部屋で無事に自分の水着を見つけられたようで、海水パンツを着用し、しっかりと大切な部分をガードしていた。
指揮官はそこで、スロカイの活躍によってタコは空高く吹き飛ばされ、脅威は排除されたことを全員に伝えた。
「そうなの！　あー、よかった」
「水着は取られちゃったけど、まあいっか」
それにより、シャロや龍馬など直接的な被害を受けた者たちは歓喜し、子どもたちの安全を確保できたことでグニエーヴルは安堵するの

だが……

（そういえば……）

その一方で、指揮官は気になっていることがあった。

（アイリスって、タコに襲われたんだよね？）

「ええ。そうだけど……」

「え？　でもそれっておかしくない？　指揮官はさっき言ったよね……タコは子どもの水着を狙うって」

指揮官が感じた疑問をキラスターが代弁した。

（うん。そう思ったんだけどね……）

「うーん、私という存在は数世紀前から存在してはいたけど、この時代では義体を持ってまだ間もないから……そういう意味でタコさんは勘違いをしたんじゃないの？」

（いや、流石にそれは……）

そこで指揮官はアイリスを見つめた。

上品で才色兼備、高身長で肉づきの良い（ただし胸は除く）体つきの義体は、誰がどう見ても大人の女性であるといえた。さらに言えば数世紀も幽霊だったという彼女の背景を鑑みると、精神年齢的にも幼い筈がなかった。

普通、そんな彼女を子どもと見なすだろうか？

そんなことを考えながら、指揮官はアイリスを見つめた。

「あの……指揮官、そんなに見つめられると恥ずかしいんだけど……」

（ああ、ごめんね）

アイリスが襲われた理由を考えていた指揮官だったが、つい彼女のことを見つめ過ぎていたのだろう……うっすらと頬を赤く染めるから彼女から視線を逸らすと、そこでスロカイと目が合った。

「おい、凡人」

（スロカイ様、どうなされましたか？）

「タコは子どもだけを襲うのか？」

（ええ。その筈だったのですが……）

「つまり、タコに襲われかけた余は子どもだと……お前はそう言いたいのだな？」
（いえ、そんなつもりは……それにまだ仮定の話ですので……）
スロカイは青筋を浮かべていた。
彼女は子ども扱いされることが嫌いだったことを思い出し、指揮官は慌てて首を横に振った。
そこで指揮官は、改めてタコが襲う人物の傾向について考えてみることにした。最初に襲われたのは高橋龍馬、続いてシャロ、アルト、アイリ、アイリス、最後にスロカイ
タコに襲われた人たちの共通点は……
「……」
（……ん？）
指揮官が考えを巡らせていると……
ふと、グルミが何やら後ろめたそうな表情をして、明後日の方向を見つめていることに気づいた。
（そういえば、グルミ）
「ッ……！　あ、ああ……どうした？」
（今、タコが襲おうとする人の傾向について考えていたんだけど……マンガの中にも、そういうのってあったりしなかった？）
以前読んだマンガの内容から、グルミはタコが水着を盗もうとしていることにいち早く気づいていた。指揮官はそのことを思い出し、彼からヒントを貰おうと声をかけた。
「いや、その……あるには、あるんだが……」
（そう？　もしかしたらヒントになるかもしれないから教えて欲しい。どんなに馬鹿げたものでもいいからさ……）
「ああ……わ、分かった」
グルミは小さく息を吐き、指揮官を見据えた。
「その……失礼だとは思うが、許して欲しい」
（大丈夫だよ、言ってみて）
「……確かに、マンガの中に出てきたタコも、とある条件で人を選別して水着を盗んでいた。それで……その条件というのが」

（その条件は……？）

「……バストサイズの大きさなんだ」

（うん、なるほど……え？）

グルミの口から飛び出てきた衝撃的な一言に、指揮官は思わず疑問符を浮かべた。

（それって……本当？）

「そうだ。馬鹿げているのは分かっているが……」

グルミはそう言って気まずそうに顔を伏せた。

「なるほどねぇ……じゃあ、それを踏まえて今まで襲われた人たちを見ると……ふふっ、つまりそういうことね～」

黛は今までタコに襲われたことのある高橋龍馬、シャロ、アルト、アイリス、そしてスロカイを順に見つめ……そして納得したように笑い、胸についた巨大な双丘を揺らした。

因みに、アイリはグニエーヴルと共に先に洋館に戻っているため、既に姿はなかった。

「なるほど！　つまりシャロはお子様体形の貧乳だったからエロタコに襲われちゃったってことね！」

「お子様体形で貧乳なのは曦夜だって同じでしょうが！　アンタが襲われなかったのは、ただ単に海から遠かったってだけで、立場が逆だったら襲われてたのはアンタだった筈よ！」

いつも通り、シャロと曦夜は言い争いを始めた。

「えっと、確かに胸はないけどさ……」

「僕たち、男だよ……？」

（多分……2人のことを女の子と勘違いしたんじゃないかな？　ほら、アルトくんは髪が長いし……龍馬くんは女の子用の水着を着てたし）

龍馬とアルトは複雑な表情を浮かべた。

「つまりタコがあたしを襲わなかったのは、あたしがナイスバディーだったからで……」

「いや、キラスターの場合は指揮官や姉さんたちと一緒にいたからだろ。指揮官はともかく、あんな怖い人たちと一緒にいたら誰だってお前を襲ったりしない」

「はぁ!?　何ですって！」

グルミの言葉にキラスターは激怒した。

「ねえグルミ……あとでお話ししましょう」

それと同時にトリスタは顔に影を落とし、うっすらとした笑みを浮かべてグルミを見つめた。

「怖い人たちって……私もか？」

「さ、さあ……？　リンダも気にしなくていいよ」

「……」

さらにトリスタの後ろでアルセール、レイア、そしてリンダの３人は微妙な表情になった。

「胸の大きさか……うーん、確かに他の人たちと比べると私の胸は小さい方だけど、でもシンシアに比べるとずっと大きい筈なんだけどなぁ……？」

「あら？　では削り取ってあげましょうか？」

「あー……でも襲われなかったのは、人の目が多かったのも影響してるのかも……こっちはウィオラと2人っきりだったのに対して、あっちはリルルとヴィノーラ、ジュディスもいたし……それにおばさん怖いし……」

「そう、どうやら死にたいようね」

肩をすくめるアイリスに、

シンシアはモノクルを不気味に光らせた。

（まあ、何にせよ……タコの標的が分かって良かった。これなら、また

タコが現れるようなことがあっても対処しやすいし……）
　グルミの言葉から、タコが襲う人物の傾向について納得した指揮官が、今後のことを考えようとした時だった。
「おい凡人、何が『良かった』だと……？」
（あ……）
　その言葉と共に強烈な殺気を感じ取った指揮官が振り返ると、そこにはスロカイの姿があった。表情こそ笑みを浮かべてはいるものの、その顔には青筋がはっきりと浮かび上がっており、怒りを露わにしているのは明白だった。
「顔を貸せ、凡人。少し話そうか」
（……はい）

ーーーーーー

　スロカイに連れられるまま、指揮官は近くの岩場へと移動した。人気のない岩場の真ん中にはちょうど隠れられる空間があり、ビーチからは完全な死角となっている。
「やれ」
（うわっ……!?）
　指揮官が岩場の中に足を踏み入れた瞬間、スロカイの指示でダークラビットが動き、小さなペットには不釣り合いな剛腕で、指揮官を地面の上に押し倒した。
（な、何を……ぐっ!?）
「ふふん、いい眺めだな」
　仰向けに倒れた指揮官の上にスロカイは素早く腰を下ろして馬乗りの状態になると、そこから嘲笑を発すると共に、混乱した様子の指揮官を見下ろした。
「ダークラビット、周りを見張っていろ」
『……！』

スロカイの命令を受けたダークラビットは、まるで本物のウサギのような華麗な動きで岩場を次々と乗り越えると、やがて岩場の影に姿を消した。
「さて……凡人、少し話をしようではないか」
（す、スロカイ様……とても話をするというような雰囲気ではないのですが……）
「黙れ」
（……はい）
スロカイに睨まれ、指揮官は口を噤んだ。
すると、彼女は小さくため息を吐き……
「つまり、余がタコに襲われかけたのは……余の胸が小さいからだと、そう言いたいわけだな？」
（……さ、さあ……？）
「そうやって、余を侮辱しようというのだな？」
（な、なぜそういう話になるんですか……）
お茶を濁そうとするも、まるで決めつけているかのようなスロカイの言い方に、指揮官は押され気味になった。
（スロカイ様、先ほどのやりとりを気にする必要はないと思われます。タコの傾向について確かな証拠もありませんし、特性についてまだ理解できていないところがありますので……そもそも、なぜ水着を集めるのかということも依然として不明で……）
「御託はいい……お前、納得したよなぁ？」
スロカイはそう言って身を倒し、指揮官の顔を至近距離で見つめた。
「タコの狙いが胸の小さいやつの水着だと聞いて……凡人、思いっきり頷いてたよなぁ？　それで、余がタコに襲われた人の頭数に入っていないとは言わせないからな」
（……はい、思わず）
黛やウィオラ、トリスタなど、周りに胸が大きい人物が多いこともあって、指揮官は胸の大きさに関して感覚が麻痺していたことを正直に告げた。

それと同時に、スロカイの胸も年頃の少女にしてはかなり大きい部類に入ることを伝えた。
「そうだ、今まで散々見せてきたよなぁ？　この水着に極東服、春節やクリスマスの衣装……胸ばかりを強調した服を、凡人は嫌がる余に無理やり着せ、散々いやらしい視線を向けてきた。その挙句、余の胸を批判するというのは無礼にも程がある」
（え……無理やりなんてそんな……というか、いつもスロカイ様の方から見せびらかしてくれていたような……）
「ハッ……忘れたとは言わせないぞ、事実を自分にとって都合の良いように解釈し、ありもしない虚構を作り上げる。凡人はこれだから、典型的な勘違いストーカー凡人なのだよ」
（えぇ……？）
そこで指揮官は小さく息を吐いた。
「分かったら認めろ。余は胸が小さくないと」
（は……はい）
「それでいい。全く……指揮官がこう言っているにも関わらず、あのタコ奴め……この余を胸が小さいなどと侮辱しおって」
何だかんだ言いつつも、スロカイはやはり自分の胸の大きさを気にしているようだった。
（これに関しては、別の影響があったのかもしれませんね。公式的な設定ではスロカイ様の胸はそんなに大きくないという話ですので……もしかしたら、タコはそういうものが見えているんじゃないかと）
「は？」
現に、天界宮（チュゼール編の一幕）では巨大化したヴィノーラの胸を見て、羨ましがる素振りを見せていたことから……と、指揮官がメタ的な話を口にしたところで、スロカイはじっとりとした目つきになった。
（いえ、何でもないです……）
「いや、そうだな」
（え……？）

スロカイの小さな呟きに指揮官が驚いていると、彼女は指揮官の体から身を起こし、自分の胸に手を当てた。
「確かに……ウェスパやウィオラなど機械教廷にいる者は胸の大きい者が多い。マティだって、最近は発育が良いように感じられる……最も、これは余のせいでもあるのだが……」
話している内容だけを聞くとふざけているのだと思われるものなのだが、スロカイの表情は真剣そのものだった。
「周りがそのようなものだから、比較すると胸が小さく見られるのは仕方がないのかもしれないな。だが、余はこう見えても、少しは大きくなっているつもりなのだ」
（いえ、比較しているつもりは……っ）
そこでスロカイは、指揮官の唇を指で塞いだ。
「いつか言ったよな、余はお前にだけは子ども扱いされたくない……と」
（……）
「それでな……胸の大きさでも何でも、余が成長しているところを凡人が認識していないと思うと、まだ凡人から子ども扱いされているような気がしてならんのだ……」
（……）
「どうすればいい？　余は……どうすれば凡人から大人として見られるようになる？　どうしたら、お前は余をひとりの大人として見てくれるようになるのだ……？」
訴えかけるような眼差しでまっすぐに見つめられ……指揮官は今更年齢がどうだとか正論を言える気分にはならなかった。
（スロカイ様……）
彼女の問いかけに、指揮官がどう返すべきか考えていると……
「フッ……冗談だ」
（え？）
次の瞬間、スロカイはニヤリと笑ってみせた。
「よくよく考えてみたら、余は機械教廷の教皇である。それに対し、たかが一司令官の凡人など天と地ほどの差がある……誰が凡人の顔色

なぞ伺うものか」
　スロカイはそこでわざと体重をかけるように座り直した。腹部に強い力が加わり、指揮官の口からうめき声が漏れる……
「この状況がいい例だ。教皇である余は上から凡人のことを見下ろし、凡人であるお前は下から余のことを仰ぎ見る……そういうものなのだ」
　サディステックな表情で指揮官を見下ろし
「どうだ悔しいか？　悔しかろう」
　スロカイは、勝ち誇ったように笑ってみせた。
　指揮官が軽く頷くと、スロカイは満足した様子で指揮官の頬に手を触れた。
「フッ……ならば凡人も、いつか余と対等な立場になれるよう、今のうちからせいぜい精進するがいい。私は、お前なら必ずやり遂げるられると思っているよ……」
（スロカイ様……）
　最後の最後で浮かべたスロカイの優しげな表情に、指揮官は心の中にくすぐったいものを感じるのだった。
「ふむ……話だけで結構時間を使ってしまったな」
（そろそろ戻りましょうか）
　落ち着いたところで、指揮官は改めてスロカイの姿を眺めた。年齢的にはまだまだ少女と呼べるお人ではあるものの、白い肌に整った顔立ち、そして堂々たる佇まいは大人のそれをも上回る存在感と威厳があった。
　体つきはまだ未成熟ではあるものの、この時点で胸囲に関しては同年代の他の少女と比較すると遥かに圧倒的で、それ以外に関しても一切の無駄がなかった。
「凡人、何を見ている？」
（いえ、相変わらずよく似合っていると思いまして）
　そう言って指揮官はスロカイの水着を示した。
　水着の上下がパーソナルカラーである赤に統一されていることもあり、彼女が放つ色気に情熱的なものが加わっていた。

さらに青い海を背景にすると、ただでさえ見る者全ての視線を惹きつける魅力があるというのに、その美しさはより一層引き立てられ、高められていた……
「フッ……どうせ他の奴らにも同じことを言っているのだろう？」
指揮官がスロカイの水着を賞賛すると、彼女から返ってきたのは何とも素っ気ない言葉だった。だが、その表情は満更でもなさそうだった。
（思ったことを口にしたまでです）
「そうか。まあ、凡人に褒められるのは悪い気分ではないな……見たければ、もっと見るがよい」
スロカイはそう言って、赤色の水着に包まれた自分の胸を見せつけてきた。それだけでも十分なのだが、ただでさえ馬乗りの状態になって2人の体が密着していることもあり、指揮官は気恥ずかしさを感じ始め……
「ところで、何か気づかぬか？」
（何がです？）
そう聞き返すと、スロカイは指揮官の鼻先を人差し指で意味ありげにツンツンとしてみせた。
指揮官はそこで、潮の香りに混じってスロカイの体からうっすらと甘い香りがするのを感じた。
香水ではないが、とても色気のある香りだった。
「フッ……それに考えてもみろ、なぜ余が凡人をわざわざ人気のないこの場所に誘ったと思っている？　プライベートな話とはいえ、話をするだけならば人払いをすれば海岸でも出来たはずだ」
（まさか……）
指揮官は改めてスロカイを見上げると、影の落ちた彼女の表情はにわかに赤く染まり、どこか色っぽいものがあった。
「マティは早々に墜ちてしまってな。なので凡人には、余の欲求不満の解消を手伝ってもらおうか」
（いや、流石にそれは……）
「言っておくが凡人、お前に拒否権はない。ましてや、余に命令する権

利もな。それもこれも、余を怒らせたお前が悪い……ならばその罪は、凡人の体で贖罪ってもらう」
（いえ、それだけじゃなくて……）
今まさに押し倒す形となっているスロカイからは見えないのだが、地面に押し倒された指揮官からは、岩場の上側で何やら慌てた様子をみせるダークラビットの姿が目に入り……

「タノシイ……バカンス……」

そうでなくとも、海側から徐々に迫り来る殺気に気づくことができた。

「ジチョウ……シロ……ボンジン」

（ま、マティルダ……）
ふと横に目を向けると、指揮官たちのすぐ近くにマティルダの姿があった。彼女は暗い影の落ちた顔を海面から出し、ハイライトの消えた深淵の瞳で指揮官のことを凝視していた。
「フッ……見られながらというのも結構乙なものだろ？」
（確実に殺されるんですがそれは……）
唐突に選択を迫られる形となり、指揮官は思わず大きなため息を吐くのだった。

このあと2人はたっぷり『スロぴょい』しましたとさ
［というかスロぴょいって何？］

第7話へ続く……

第7話：水底の亡霊

非公式夏イベント『水平線上のノア』
第7話：水底の亡霊

（ここは……？）

指揮官が意識を取り戻すと、そこは真っ暗な空間だった。

自分は確か、蘇瑞たちと共にダイビングをしていた筈だ。そう思い返し、指揮官が自分の体に目を向けると、自分がウェットスーツ姿であることに気づいた。

酸素ボンベを背負い、顔にはゴーグルと一体化したマスクを装着し、さらには足にフィンを付けていることからダイビングの最中にこの暗闇に紛れ込んでしまったのは明らかだった。

（蘇瑞……？）

指揮官はつい先ほどまで隣にいた仲間を探して暗闇の中で視線を巡らせるも、蘇瑞の姿はおろか、この空間の中には生き物の気配が全くと言っていいほどなかった。

それはまるで深海のような、生命の存在に適さない極限の環境だった。ウェットスーツ越しに感じられる水は恐ろしく冷たく、暗闇の中で1人心細さを感じる指揮官の心に追い打ちをかけるように体を凍りつかせていく。

指揮官はその場で頭上を仰ぎ見るも、そこには空虚な闇が広がるばかりで太陽の光どころか一筋の明かりすら見えなかった。

そもそも、背負った酸素ボンベも重さを感じなかったことから、指揮官は徐々に体から平衡感覚が失われ始めていることに気づいた。目印となる物もなく、まるで宇宙空間にでもいるような無重力感に苛まれる……

最早、自分が今見上げているのが海面なのか海底なのかすら分からなくなってしまった。暗闇に対する恐怖心から呼吸の回数が増え、ボンベに注入された酸素の消費量が増える。既に半分以下になってしまった酸素残量を確認し、指揮官が焦りを感じ始めた時だった。

（……？）
その時、どこからともなく音が響き渡った。
グジラが発する低い、それでいて海中でもよく響き渡る声にも似たそれは、突如として深淵の中から現れ、そして深淵の中へ消えていった。
（白い……鯨……？）
やがて、指揮官の目の前に巨大な白クジラが悠々と姿を現した。巨大な頭部構造が特徴的だったことから、それがアルビノのマッコウクジラであることが分かる。
特筆すべきは、その背中に誰かがしがみついていることだった。白鯨の背中に刺さった銛に必死にしがみつき、海中に引きずり込まれてもなお、白鯨の背中を銛で貫こうともがいている。
（あれは……！）
およそ30メートルもある白鯨が指揮官とすれ違う。
間近に迫った白い巨体に圧倒されながらも、指揮官はその一瞬の間に、白鯨の背に乗る人物……いや、それは指揮官だった。
指揮官はもう1人の自分と目を見合わせた。
「……」
（……！）
指揮官は、白鯨の背に乗る自分がニヤリと笑ったような気配を感じた。しかし次の瞬間、白鯨の巨大な尾ひれが……かのエセックス号ですら一撃のもとに粉砕した力強いドルフィンキックによる推進で、発生した水流により指揮官の体はさらに深淵の奥底へと飲み込まれてしまった。
（……ぐっ）
かなりの距離を流され、闇の中で指揮官が目を開けた時には、既に白鯨の姿は見えなくなってしまっていた。
再び、深淵の中に孤独となった。
しかし、指揮官は闇の中から視線を感じた。
『我々が深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗き込んでいる』まるでその言葉を証明するかのように、どこからともなく深淵の中からこちら

を覗き込む強烈な視線が、全身を突き刺さっているような感覚に陥った。
指揮官は水中ライトを取り出して、深淵の中を照らした。しかし、水中でも数十メートルは届くはずの強烈な３０００ルーメンの光でも、僅か５０センチ先の空間を照らし出すだけに終わった。
まるで見えない何かがライトの光を吸収しているかのようである……
再び、どこからともなく音が響き渡った。
しかし、先ほどの白鯨が放った低い声とは違い、水中で金属が軋むような……例えるなら、それは潜水艦が圧壊する時に発する『叫び声』にも似ていた。
そこで指揮官は、見えるはずのない深淵の向こう側で巨大な何かが蠢く気配を感じた。
視認することは出来ない。しかし、指揮官は確かにその存在を感じ取ることが出来た。それは白鯨よりも遥かに巨大な存在で、海の最果てにまで通じるのではないかと思うほどの長い体躯を横たえ、海底に擬態しながら永い眠りについていた。
指揮官がそれを認識した時だった。
海底に、小さな白い光が浮かび上がった。
突如として深淵の中に現れた一筋の光。
冷たい水に包まれた中で、その光は一層暖かな気配を放っていた。まるで誘蛾灯の明かりに吸い寄せられる夜の蝶の如く、指揮官は虚空の中に浮かび上がる白い光から目を離せなくなっていた。
（……）
冷え切った体に温もりを欲した指揮官は、その光にすがりたい気分に陥った。何よりも、長時間たった1人で暗闇の中にいたことで、指揮官の心的疲労はピークに達していた。
指揮官の体が海底に向かってゆっくりと沈降していく。
……
再び、機械の軋むような『叫び声』が響き渡る。それはまるで、指

揮官のことを海底に誘っているかのようだった。
白い光に向かって、指揮官が手を伸ばした時だった。
（……？）
その時、指揮官は誰かに腕を掴まれる気配を感じた。
「主様……」
（ノア……？）
指揮官がハッとして振り返ると、いつからそこにいたのだろうか……そこには青髪の少女『ノア』の姿があった。
『ノア』は指揮官の腕を引き、小さく首を横に振った。
「主様、こちらです」
水中であるにもかかわらず『ノア』の声は指揮官の耳にはっきりと届いた。指揮官が頷くと、彼女は腕を引いて海底とは真逆の方向に向かって浮上を始めた。
浮上する間、指揮官はふと海底に目を向けると、海底に横たわる巨大なそれの気配は感じられなくなり、光もまた忽然と姿を消していた。
？？？？？？？……
ただ、機械の軋むような『叫び声』だけは、いつまでも深淵の奥底から響き渡っていた。

ーーーーー

（……うぅ）
体に優しく押し寄せてくる波の気配に、指揮官はゆっくりと目を覚ました。
「主様、お目覚めになられましたか？」
（ノア……）
見上げると、そこには『ノア』の姿。
波打ち際で眠る指揮官の顔に海水がかかってしまわないよう、彼女

は自身の膝を枕代わりにして指揮官のことを介抱していた。
（ここは……？）
「『島』の砂浜です。もう一つ付け加えますと……主人様がポーラ様たちとダイビングの準備をしていたところの、すぐ近くです」
その言葉に指揮官が視線を横に向けると、彼女の言葉通り、近くにはポーラと蘇瑞が用意していた休憩用のテントと、ボンベに酸素を詰めるための機械が置かれていた。
また、酸素ボンベやマスク、フィンなど指揮官がつけていたダイビング装備はいつのまにか取り外され、砂浜の上に転がっていた。
（また、助けられたね……）
「いえ。主様のお役に立てることこそが、私にとっての全てですので……」
（助けてくれて、ありがと）
「……どういたしまして」
指揮官が礼を述べると、ノアはいつもの冷たい無表情を崩さずに小さく頷いた。しかし、指揮官の額を撫でる彼女の手はほんのりと温かく、触れられているだけでも心の底から安心感を覚えるほどだった。
暗い海の中に、ずっと1人でいたことも影響していたのだろう。また、ゾッとするような冷たい水に包まれ、芯から冷え切っていた筈の体はいつのまにか程よく温められていた。
真上には穏やかな輝きを放つ太陽、押し寄せる波は陽光をめいいっぱい吸収し、ぬるま湯に浸かっているかのような感覚を指揮官にもたらした。
極限の環境下に置かれた先ほどとは打って変わって、春先のような心地よさに包まれ、気持ち良さのあまり指揮官が思わず再び目を閉じかけた……その時だった。
「あ！　指揮官いたー！」
ちょうど海の方から聞こえてきたその声に目を開けると、そこにはダイビング用の装備に身を包んだキラスターの姿があった。
少し遅れて、同じくウェットスーツ姿のポーラが海面に姿を現わす。

「指揮官！　よかった、無事だったんだね！」
（うん、なんとかね）
　指揮官が身を起こすと、ポーラは慌てた様子で足についたフィンを脱ぎ捨てた。そうして海から上がって指揮官の前に歩み寄るなり、それから少しだけ怒ったような表情になった。
「もう、心配させないでよ！　ダイビング中は何があっても私たちから離れないでっていつも言ってるでしょ？　私と蘇瑞が初心者のキラスターを見ている間に、いつのまにかいなくなっちゃうんだから、みんな凄く慌てたんだよ……？」
「そうだそうだー☆」
（2人とも、ごめんね……）
　それに関しては不可抗力でもあったのだが、これ以上2人に心配をかけるわけにはいかないと、指揮官は素直に謝る事にした。
「全く……指揮官の身に何かが起こったとなると非常にマズイんだから、常日頃からもっと注意してよね！」
（ん……心配してくれてありがと）
「べ、別に……そもそもダイビングに誘ったのはこっちだし、だから何かあった時に責任を取らされるのは私の方だから……ああっもう！
　とにかく指揮官が無事で本当に良かった！　うん」
　そう言ってポーラは深いため息を吐くと共に、ホッと胸を撫で下ろした。
（そういえば蘇瑞は？）
「まだ海の中で指揮官ことを探してると思う。というわけで、もうひと泳ぎして蘇瑞を呼んで来るから少し待っててね……」
　ポーラはそう言ってフィンを手に取り、再び海の中へ潜ろうとするのだが……その前に、レーダーを収納した『ノア』は「その必要はありません」と彼女のことを呼び止めた。
「え……？　それってどういう……」
「蘇瑞様なら、今こちらに向かってきている模様です。どうやら酸素の残量が少なくなってきているようで、補充を必要としているのでしょう」

「え？　なんでそんなこと分かるの？　っていうか……今更だけど、あなた誰？」
「申し遅れました。私は『ノア』と申します。僭越ながら、この『島』を管理させてもらっている者です」
　そう言って『ノア』は小さく頭を下げた。
「ああ、管理人さんね……」
　それを聞いて、ポーラは納得したような表情になる。
「そうそう！　ノアってば、凄いんだよ！　なんかよく分からないけど頭にレーダーみたいなものを生やして、島にいる人や物を探すことが出来るんだよ」
「へー……？　よく分からないけど、それは落し物をした時には便利そうね……」
　キラスターの言葉にポーラは疑問符を浮かべた。
「まあ、それはいいとして……あなたが指揮官を助けてくれたってことでいい？」
「はい。たまたまこの近くを泳いでいたところ、深みにはまって動けなくなっている指揮官を見つけたので、救出しました」
「そっか……たまたまこの近くを泳いでいた……って、その格好で？」
「そうですが、何か……？」
　ポーラは『ノア』を怪訝そうな目で見つめた。
　というのも『ノア』は今、日ノ丸の伝統的な水着であるスクール水着（紺色）を着用しているだけで、酸素ボンベやゴーグル、フィンなどといったダイビングに必要な装備は一切しておらず、また持っている素振りすら見られなかったからだった。
　指揮官たちはダイビングをする為に沖に出ていた。しかし、この少女はロクに装備を整えず沖に出たとでも言うのだろうか……ポーラの抱いた疑念は、その点にあった。
「いや、その……そんな水着1つで沖に出るなんて危なくない？　離岸流とか色々あるし、ここにちゃんと装備を整えたにもかかわらず、溺れかけた人もいるんだし……」
（反論の余地もありません）

「いえ、問題はありません。私は溺れたりしませんので……」
「いやいや、いくらあなたが地元の海を知り尽くしているんだとしても、その慢心が危ないんだって……いやまあ、指揮官を助けてくれたのは十分に感謝してるけど、準備は大事だよ？」
「……分かりました。以後、気をつけます」
ポーラの提案を聞き入れ、『ノア』は小さく頷いた。
（というか、なんでスク水？）
「これが私が海に出る際の標準装備というのもありますが、これ以外で他に水着を持っていないもので」
（そ、そっか……）
指揮官は『ノア』の着けている水着をざっと見返した。彼女のスク水は、何故か前側に水抜きがついているタイプの……いわゆる『旧スク』と呼ばれるものだった。
エル［なるほどね！　これが『同士』なのね！］
フル［少し違いますが、お揃いなのです！］
そこで指揮官は、そういえばエルとフルも海に誘った時にはスク水を着けていたことを思い返した。あの２人はどうだったかな……と、割とどうでもいい事を一瞬だけ考えていると……
「似合いませんか？」
（いや、そんなことはないよ……けど……）
「けど？」
ノアはそこで小さく首を傾げた。
元々、子どもが着ることを前提として作られた紺色のスク水は『ノア』の小柄な体型も相まって、よく似合ってはいた。しかし、海で着るとなると話は別である。
どうせならもっと可愛い水着を着てもいいのに……言葉を待つ『ノア』へ、指揮官がそう言いかけた時だった。
「……あ」
その時『ノア』はふと頭にレーダーを立て、海の方向を指差した。
「海坊主……」
「（え!?）」

３人は一斉に『ノア』が指差した方向を見つめた。
「う～～～～～」
間も無く奇妙な呻き声と共に、毛むくじゃらの黒っぽい人型生物が海面に姿を現した。
「ええ!?　なにあれ……クラーケン!?」
「ば……バケモノ!?　妖怪!?　それとも深海棲艦!?」
（ゲームが違うから！　っていうかこの声……）
指揮官は、その声に聞き覚えがあった。
「うえええぇ……指揮官いないよ……どこ行っちゃったの～～～？」
３人の見ている前で、黒っぽい毛むくじゃらはヨロヨロと海岸に辿り着くと、何やら人語を発してその場で泣きじゃくり始めた。
（やっぱり、この声……蘇瑞だ！）
「……って、あれ？　指揮官いる……？」
指揮官の姿を見るなり、蘇瑞はポカンとした表情を浮かべ……間も無く、感極まったかのように瞳をウルウルとさせ勢いよく指揮官へと抱きついた。
（うお!?）
「指揮官！　生きてたんだね～よかった～～～！」
（ひ、人を勝手に殺さないで……というか、なにその黒っぽいの？）
「ああこれ？　指揮官のこと探してたら、海藻の中に頭から突っ込んじゃって、えへへ……そんなことよりも、指揮官が無事で良かった～」
その言葉通り、蘇瑞の黒髪には大量の海藻が絡み付いていた。さらに黒いウェットスーツを着用していることもあって、全身が真っ黒な怪物に見えてしまっていた。
「やれやれ、何はともあれこれで一件落着ね」
「そだね！　ノアもお疲れ様☆」
指揮官の体に黒っぽい海藻を押しつけながらスリスリとする蘇瑞を、ポーラとキラスターは微笑ましげに見つめ、それから『ノア』へと視線を送った。
「あれ？　管理人さん？」
「あれ？　いない……おかしいなー、さっきまでここに居たのに」

しかし、つい先ほどまでその場にいた筈の『ノア』は忽然と姿を消していた。ポーラとキラスターは周囲をキョロキョロと見回すも、彼女の姿は影も形も見えなかった。
「ねえねえ指揮官、ノアどこ行った？」
（ん……まあ、気にしなくてもいいよ）
キラスターにそう告げて、指揮官は相変わらずニコニコと自分の体に張り付いている蘇瑞へと視線を落とした。
（彼女にも、色々と事情があるから……）

ーーーーー

一方その頃……
指揮官たちがいるビーチから遠く離れた島の反対側では、グルミ、アルト、シャロ、曦夜、そして高橋龍馬の５名が持参した水鉄砲で撃ち合い、めいいっぱい海を楽しんでいた。
「この……！　曦夜しつこい！」
「ええい！　シャロ！　さっさと死になさい！」
しかし、水鉄砲の撃ち合いは時間が経つにつれ徐々に白熱していった。主にライバル意識を燃やしたシャロと曦夜が壮絶な戦いを繰り広げるようになり、その様子にグルミたちは「またか……」と意気消沈してしまうのだった。
「そ、そうだ２人とも！　あっちで競争しようよ」
「ん、そうだな」
「うん、いいよー！」
アルトの提案により、３人は気を取り直して水泳による競争を行うことを決めた。シャロと曦夜から距離を取って、遠く離れた岩場をゴールに決め、そして一斉に泳ぎ始めた。
「わっ!?　２人とも速い!?」
その直後、物凄いスピードでスタートダッシュを決めるグルミとア

ルトを前に、龍馬は驚きを隠せなかった。
「でも、僕だって負けてないからね！」
心の中でそう呟き、龍馬は2人に追いつこうと絶賛練習中のクロールを披露した。そんな彼に忍び寄る1つの影があることも知らずに……
「はぁ……はぁ……やった！　僕の勝ちだ！」
「はっ……はっ……ふぅ……速いね、アルト君」
タッチの差で先に岩場に辿り着いたのはアルトだった。
「そう言うグルミくんだって結構速かったじゃないか！　スタートダッシュが上手く決まっていれば、多分、負けてたのは僕だったと思うよ？」
「いや、今の俺にはこれが限界だ……完敗だよ」
息を整えながら岩場に座り込み、2人がお互いの健闘を讃え合っていると……
「うわぁ!?」
「「っ!?」」
どこからともなく響き渡った悲鳴に2人が振り返ると、そこには龍馬の姿があった。しかも、何やら水中でもがき苦しんでいる……
「り、龍馬くん！　どうしたの!?」
「アルトくん……！　あれを見ろ！」
『うじゅじゅじゅじゅ～～～♪』
グルミが指差した方向にアルトが目を向けると、龍馬の背中にまたしてもタコが張り付いていた。
ダークラビットによって天高く吹き飛ばされた筈のタコだったが、どういうわけか『島』に戻ってきていた。
「ちょ……!?　なんで僕を狙うのさ！　男！　僕は男の子だってば！」
『うじゅ？』
タコはそこで、ようやく龍馬が男性用の水着を着ていることに気づき、驚いたような表情を浮かべた。しかし、それでもなお龍馬の体から離れようとすることはなく……それどころか龍馬の海パンに触手

を伸ばし始めた。
「えぇ!?　なんで!?」
『うじゅじゅ！』
慌てる龍馬に、タコは「普通に考えて、こんなに可愛い子が男の子な訳ないじゃないか！」と説明し、さらに「上を着ていないのはヌーディストビーチの例があるから～」と付け足した。
「って、説明しても何言ってるのか分からないよ！」

「説明してるってのは分かるのか？　龍馬くん……」
「それよりも、早く助けないと！」
龍馬を救出しようと、アルトが慌てて海に飛び込もうとした時だった。
「2人とも！　来ないで!!!」
タコに絡みつかれた龍馬は、2人に助けを求めるどころか、むしろ必死な様子でそう告げた。
「そ、そんな……でも……」
「いや、アルト君待て！　何か考えがあるみたいだ」
グルミに止められ、アルトは海に飛び込む寸前で岩場にとどまった。タコと格闘しながら、龍馬は2人が海から上がっていることを確認すると、そこで……
「いくよ！　オーバーロード!!!」
『うじゅーーーーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!』
龍馬は体内に蓄積された電流を放出させた。
海中という逃げ場のない環境下で放たれた電撃は、超広範囲のＭＡＰ兵器と化し、水タイプのタコに対して効果抜群だった。
「いや、ゲームが違うだろ……」
「でも見て！　すごく効いてるみたいだ！」
岩場の上に避難していたグルミとアルトに電撃の被害が及ぶことはなかった。しかし、指揮官との特訓で電撃の技に磨きがかけられたことにより、電撃は彼自身が思っていた以上に広範囲へと影響しており……

「ぐえええええええ!!???」
「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!??」
その為、海水を伝って遠く離れた場所で水鉄砲を撃ち合っていたシャロと曦夜にも電撃が及んでしまった。電撃をモロに食らった2人は絶叫し、それから目を回して仲良くプカーンと海に浮かんだ。
『う……うじゅ……』
電撃を至近で受け、タコは丸焦げになった。
龍馬の体や水着に張り付いていた触手は力なく垂れ下がり、やがて動かなくなったタコの体は海流によって押し流され、そのままタコは海中へと姿を消した。
「や……やった！　ねえねえ2人とも！僕やったよ！」
「すごいや！　やったね龍馬くん！」
「ああ……正直、見直したぞ」
見事、タコの撃退に成功し、3人は歓喜に包まれるのだった。
しかし、その一方で……
タコのいなくなった海中に、電撃のショックで剥がれた落ちたタコの皮膚の一部が漂っていることに気づく者はいなかった。

続く……